阿呆浪士

作　鈴木聡

登場人物（登場順）

三味蔵

八

お直

おはん

弥助（大石内蔵助）

スカピン

一八

幸

田中貞四郎
大野黒兵衛
大石すず
元禄堂長太
火消し一蔵
火消し二蔵
火消し三蔵
火消し五蔵
火消し六蔵
茶屋亭主花吉
お熊

吉原番頭藤吉
若い衆一吉
若い衆二吉
若い衆三吉
若い衆五吉
若い衆

喜多川（お道）

おかね

町衆一太
町衆二太
町衆三太
町衆五太
町衆六太

磯貝十郎左ェ門
大高源吾
吉田沢ェ門
堀部安兵衛
勝田新左衛門
吉田忠左ェ門
吉良上野介

奥花道より唸り屋三味蔵登場。

唸り屋三味蔵、赤穂浪士の一席

三味蔵　えー、ようこそいらっしゃいました。
どーなっちゃったのと思われた方もいらっしゃると思いますが舞台の中に皆様方もいるというそういう感じでございます。
皆様方と一緒にこのお芝居を楽しみたい、皆様方に盛り上げていただいてお芝居をつくっていただきたい。

拍子木。

三味蔵　それでは始めさせていただきます。

〽頃は元禄十四年
春三月の十四日

所は殿中
松の廊下

（吉良）「ぶはっ、浅野殿、本日登城の遅刻は何じゃ。重き役目にありながら時も守れぬ、時も守れぬ田舎大名では。ほっほっほっほっほ。困ったもんだ」

（浅野）「何をおっしゃいます吉良殿。昨日貴方の仰せの通り、やってまいればの今日の遅刻。偽りを教えたのは吉良殿、貴方ではございませぬか」

（吉良）「ふぉっふぉっふぉっふぉ、浅野殿。今、おぬしなんと言われた。吉良殿と言われたか。おのの身分からすれば吉良様というのがあたりまえ。身分をわきまえぬ田舎大名。これ田舎大名。鮒侍とはそちのこと。ぶるぶるぶる、そうではないか。わけも分からず殿中を、あっちへうろうろ、壁にゴッツン。こっちへうろうろ石にドッカンドッカン。ぶぁははは、鮒じゃ鮒じゃ鮒侍とは、そなたのこ」

（浅野）「くわーっ！　おれの上野！　覚悟ー！」

（侍）「あっ！　殿中でござる！　殿中でござる！」

さ、拍手は遠慮せず。

今日は、私が今演りました忠臣蔵、これがテーマのお芝居でございます。私が今演りましたのは、「刃傷松の廊下」という、殿中・刃傷。この松の廊下の刃傷事件が発端で忠臣蔵という大きなストーリーが展開するわけでございます。ま、今日は皆様が忠臣蔵のお芝居を観るにあたって、皆様もお腹の底から忠臣蔵。よろしいですね。今私が演りましたところを、ちょっとご一緒に演ってみましょう。いいですか？

ま、長いサイズは大変ですから、鮒じゃ、（お客さんに）演るんですよ。そんなことを演って役に立つかとお思いでしょうが、結構役に立つ。居酒屋で友達と飲んで、喧嘩になりそうな時、後から「殿中でござる。殿中でござる」と止めに入る。あまり、殿中で喧嘩をする人はいませんから、その喧嘩の場所を言う。「居酒屋でござる。居酒屋でござる」「職場でござる。職場でござる」場所を言うともう、止められた方も「どうしちゃったんだ。分かったよ。もう。止めるよ」と止めたりなんかします。効能が分かったところで、さんはい。

鮒じゃ、鮒じゃ、鮒侍とはそなたのこ
くー！

演るんですよ、皆さん。
おのれ上野……震える！　さあ、震える。ご主人、震えて、震えて……

覚悟お！　さあ、殿中でござる。殿中でござる。ああ、演りましたね
え。ハハ、普通は演らないんですよお。
かくして、殿中で刃傷事件を起こしました浅野内匠頭即日切腹。
ところが、一方の吉良にはなんのお咎めもなし。
（赤穂侍）「かたがた、このままに捨て置くつもりか」
「馬鹿を言え！　赤穂の武士たるもの、殿の無念晴らさでお
くべきか！」
〜もうこうなれば我々は
討ち入り以外に道はなし
みなぎる忠臣武士の意地

赤穂浪士が立ち上がる

拍子木。

三味蔵、奥花道へ退場。

オペ室花道から風呂敷包みをもったお直、それを追いかけて八登場。

八　よお、待ちなよ、待ってくれってえんだよ、お直ちゃん。

お直　いや、待たない。

八　つれねえな、同じ長屋のよしみじゃねえか。

お直　だって、八つぁん、いやらしいことするんだもの。

八　誰がするんだよそんなこと。今日は手相見てやろうと思ってよ。

お直　何よ手相って。

八　ほら手のひらにすじみてえのがあんだろ。これで人の運勢がわかるって学問だ。

お　直　へえ。八つぁん、なんで知ってんの。

八　まあ、俺は棒手振りの魚屋だ。いろんなうちに出入りすっからいろんな話が耳にへえってきてよ。どれどれちょっと貸してみな。

お　直　どうあたしの運勢。

八　ああ、あんあんあん。

お　直　どうなのよ。

八　あ、ここほくろあるんだ。

お　直　ほくろも関係あるの。

八　うん、うん、なるほどね。（と二の腕を撫でてゆく）

お　直　なに、そんなとこ手相ないわよ。

八　チュッ。

お　直　（突き放して）何すんのよっ。

八　（舌をだす）

お　直　恥ずかしくないのかな奥さんのいる人が純情な娘にこういうことして。

八　ない。

お　直　馬鹿。

八　だって俺の気持ちだもの。なんつうの？　不器用な愛の表現？　ほら俺江戸っ子だからスパスパッと単刀直入によ。そのほうが色恋だってわかりやすくていいじゃねえか。

お直　わかりやすすぎるわよ八つぁんは。しょっちゅう裸で道あるいてるし。おならの音も長屋中に聞こえるし。そういう人、好きになれる？

八　しょうがねえじゃねえか、腹にためておけねえたちなんだよ。飯くうたび糞ださなきゃ気がすまねえんだコン畜生。好きだぜお直ちゃん！

お直　カッコイイだろこういうの。

　あ、八つぁん、赤穂浪士だったりしないかな。

八　赤穂浪士？

お直　もしも八つぁんが赤穂浪士だったら、あたし好きになってもいいよ。

八　ほんとけえ。

お直　だって素敵じゃない。八つぁんはいつか仇討ちする時を待って貧乏長屋の魚屋に身を落としてるわけよ。

八　うん。

お直　で、好きでもない女と所帯を持ったわけね。これも赤穂浪士でないことを疑われないため。

八　なるほど。

お直　でもまだそれだけじゃ心配なわけ。で、わざと裸で歩いたり、長屋小町と評判のきれいで気立てがよくて男なら誰でも振り返る娘にちょっかいを出して自分の評判を落としてるの。八は馬鹿だ、あんな馬鹿は見たことがねえ、いいか坊主、あの魚屋と目を合わせるんじゃねえぞ、目が合っただけでも馬鹿がうつるからな、と世間を油断させておいて時が来たら命をなげうって仇討ちに立ち上がる。もしそうだったら、あたしすぐ、八っぁんの胸に飛び込むのにな。

八　俺……赤穂浪士なんだ。

お直　……馬鹿。（奥花道へ）

八　おい、そりゃねえだろっ。

お直　赤穂浪士は自分で赤穂浪士なんて絶対言わないの！（奥花道へ退場）

八　待てよお直ちゃん！

奥花道から、お直の姉、おはん登場。

おはん　お直に手を出さないで！

八　お、出戻りの姉が出てきやがったな。てめえはすっこんでろ。

おはん　何よ。なぜそんなにお直と扱いが違うの。器量だって大して変わらない。いいえ、むしろ目鼻立ちの整い方という点ではあたしのほうが勝っているわ。それなのになぜ、なぜあたしはこんなに幸が薄いの。

八　お、てめえ世間を恨んでるな。

おはん　お直にはお見合い話が来た。これから花火を見ながら屋形船で提灯屋の倅とお見合いよ。それなのになぜ、あたしは腰巾着のような連れ添いなの。わからない……

八　自問自答するな、出戻りの姉。

おはん　妹の幸せよりあたしの幸せよ。すきを見て提灯屋の倅を奪ってやる。

お　直　（声）おねえちゃん、はやく！

おはん　ふっ、そうとも知らないで。

八　何者だおめえは。

おはん　そうだ、八つぁん、こないだはサバありがとう。

八　いいってことよ、ありゃ残り物だから。うまかったかい。

おはん　くさってたわ。

八　そりゃ悪いことしたな、腹こわしたろ。

おはん　大丈夫、猫に毒味させたから。おたくの前に死体がころがっていたでしょう。

八　ありゃてめえの仕業か！

おはん　ハハハハ。

八　出戻り、おそるべし。

おはん走って奥花道へ退場。

八　おい気をつけろそこドブのフタあいてっから……

ボチャーンと落ちる音。

八　見なかったことにしよ。

オペ室花道から風車売りの弥助登場。風車が刺さったわら束を首から下げている。

八　おう弥助、いいとこ出てきやがったな、機嫌かえてえんだ、いかねえか。

弥助　悪いけど駄目。ちょっと用事があってさ。

八　お、きどりやがったなてめえ。なんでえ、風車売りの用事ってのは。

弥助　風車組合の寄り合いだよ。

八　寄り合いだとコン畜生。寄り合って何すんだ、こんなふうにみんなでクルクルまわんのか、ケケケケ。

弥助　まわんないよ、話し合うんだよ、こんどの祭りの場所分担とか、今年の夏は十二枚羽が流行りそうだとかさ、こんなふうにまわったら目が回っちゃうじゃないか。

八　マジんなんなよ、シャレだよシャレ。

弥助　なんだシャレかー、じゃ先に言ってよ。俺くるくるまわっちゃったじゃない。

八　どうもおめえと喋ってると調子がくるくるくるっちまうなあ。

弥助　ごめんね、田舎もんだから。江戸も慣れてないしさ。

八　そういう正直なとこが憎めねえんだ、男振りもいいし、身持ちも堅そうだし、おい白状しな、ずいぶん女泣かせたんじゃねえのか。

弥助　ハハ、まあね。

八　カーッ、焼けちゃうなあ、よっ日本一、風車の弥助、風がなくてもよく回るう！　というわけでどうでえ一杯。

弥助　それはだね、俺、幹事だから。さよなら。（花道に）

八　おい、つめてえぞ。

弥助　またこんどねえー。（奥花道へ退場）

八　なんでえ、付き合いの悪い野郎だな、往来で友達と会ったらさ「よっ一杯いくかい」「いいね、深川でどうでえ」この呼吸でうまくいくんだ江戸って街は。野暮だね、あいつは。風とともに去れコン畜生。

弥助　よお、ドブに誰か落ちてるよ。

八　ほっとけ！

音楽。八、オペ室花道へ退場。スカピン、一八、客席花道から登場。

一八　おーい八つぁーん。

スカピン　いたら返事しろー。

一八　ほんとにこのへんなんでしょうな、その八つぁんという人の住まいは。

スカピン　ああ、間違いねえや。だがこう似たような三軒長屋が並んでっから、どこだかわかんなくなっちまったぜ。だけどよ一八。

一八　へいスカピンの大将。

スカピン　そのおめえの計画ってやつはうまくいくんだろうな。

一八　おまかせください。これはもうああた、間違いないでげすよ。だってね、あそこの飲み屋で久々にああたに会ってあたしはピーンと来たね。この人は運が向き始めているな、銭がドヒャドヒャとはいる顔をしているな、と。

スカピン　ほんとけえおめえ、またいつものこれじゃねえの。

一八　ノンノンノン。これでもあたしは太鼓もちでげすよ。出世しそうな旦那を見つけるのが商売でげすからな。前をあるってる背中を見ただけでも人の運不運がわかります。

スカピン　そんなに俺の背中はいいかい。

一八　けっこうでげすな、拝見してるとこう、たいへんおめでたい絵が見えてきますな。

スカピン　ほう、どんな絵だい。
一八　大黒様が。
スカピン　おう。
一八　交尾するマネキネコとコマイヌさんに水をかけてます。
スカピン　ほんとにめでてえのかその絵。
一八　三点セットでげすよ。
スカピン　まあいいや、こっちは落ちるとこまで落ちたサムライだ。いまだに武士道なんぞを振りかざす赤穂浪士とかいう立派なオサムライとは大違いだ。遊べる銭ならどんな銭でもいい。おめえの話にノッたぜ。
一八　しかし三人組の計画ですからな。その八つぁんって人がノッてくれないことには。
スカピン　それなら心配いらねえよ。俺に輪をかけたスットコドッコイだからな、銭が絡むとなりゃよだれ垂らして食いつくぜ。
一八　じゃあ、急ぎましょう、花火の人出が多いうちに。
スカピン　おうっ。

音楽。二人オペ室花道へ退場。

八、ロビー花道から登場。

八　ガラガラッ。おう、帰ったぜ……いねえのか。

八、懐から枕絵を取り出す。

八　へへ、たまんねえなこの枕絵は。こういう女と一度でいいからなあウフフ。

音楽ＯＵＴ。八、戸を開け女房が帰ってこないのを確かめ、いそいそと枕絵を床に広げる。その間に、オペ室花道から女房の幸が登場し中に亭主がいる気配を感じ取り障子穴を開けて覗く。八、事の寸前でその視線に気づく。

八　うわあ、かかあ、てめえなんで自分ち覗くんだ。

幸　気になるのよ、あんたが一人で何してるか。

八　気持ちわりいじゃねえか、早く中にはいれってんだよ。

幸　ガラガラッ、入ったわよ。
八　つっ立ってねえでもっと普通にすりゃいいじゃねえか。
幸　これがあたしの普通よ。
八　そうなんだ、それがてめえの普通なんだ、その不気味なのが普通の女と俺はもう十年、暮らしてるんだ。日本一不幸な男だよ俺は。
幸　あたし意外と幸せ。
八　鈍感なんだよてめえは。（と幸をぶつ）

幸、何もなかったようにしばらく歩いてから。

幸　痛い。
八　古代生物かてめえは。
幸　ごはん食べるかい？
八　いらねえ、どうせ納豆だろ。
幸　（かきまぜながら）そうよ、納豆しか買えないもの。
八　あてつけがましいこというんじゃねえや。
幸　あら、あてつけてなんかないわよ、事実。

八　おう、ひとつだけてめえのこと褒めてやろうか。
幸　なんだい、ほめとくれよ。
八　てめえは納豆かき回してる姿が似合う女だよ。
幸　……ありがと。
八　ちったあ傷つけ。
幸　傷つくって何？　シャカシャカシャカシャカ（と納豆ごはんを食べる）。
八　ああっ……！
幸　愛してる？
八　愛してるわけねえじゃねえか。いったいてめえはどっからそういう妄想が生まれるんだよっ。
幸　ごはん食べるとすることもないねえ。
八　ああ、不幸せだよ俺たちは。
幸　あたし名前、幸ってんだよ。
八　知ってるよ。てめえほど名と実がともなわねえ女もいねえな。（枕絵を出して）畜生、どうしてこういう女と巡り会わなかったかな俺は。
幸　さて、布団でも敷くかね。

八　ああ、いいっていいって、俺が敷くからよ。おめえはそこで休んでな。

幸　あらどうしたんだい。急にやさしいじゃないか。

八　あたりめえじゃねえか夫婦だろ、おもむろに愛しさがこみ上げてきたっつうかよ。

幸　なんだやっぱり愛してたんじゃないか。

八　さあ、そこ寝てみな、疲れてんだろ、俺が按摩でもしてやっからよ。

幸　夢みたいだよ今夜は（と寝る）。

八　おお、いいね、浜に打ち上げられたマグロみてえでよ。

幸　あたしはあんたのマグロだよ。

八　このへんかい。

幸　ああ、いい。

八　目つぶりなよ、そのほうが効くからよ。

幸　あいよ。

八　ああ気持ちいいねえ、眠くなったら寝ちまってもいいんだぜ。

幸　やだよそんなのもったいない。

八　ちょっと待ってな、目あけんじゃねえぞ。

幸　あいよ。

八　（舌を出して枕絵を取り出し幸の顔にかぶせる）

幸　あら、なんだいこれ。

八　なんでもねえよ、按摩がよく効くまじないだ。さあ、いくぜー。

と、八、着物の裾をめくる。と、ロビー花道からスカピンと一八登場。

スカピン　ガラガラッ、やっと見つけたぜ八つぁん。

八　なんだスカピン、邪魔すんじゃねえや。

スカピン　金儲けだ、一晩で三両になるぜ。

八　ほんとかっ！

音楽。

一八　いい背中だ、ああたの運はこれからうなぎ上りでげすよ！

スカピン　生活変えようぜ、八。俺たちの人生はまだ終わりじゃねえ。

八　あたりめえよ、棒手振りで一生終わるか。

一八　さあ、はやく両国橋の茶店通りへ。

八　いってくるぜ、おっかあ。

幸　あたしはどうすんだよ。

八　鼻くそほじって寝てろ。できればそのまま一生起きるな。

三人、ロビー花道へ走って退場。

幸　ちょっと、あんた（枕絵を見て）バカヤロー！

幸、奥花道へ退場。

両国茶店通り。お花茶屋の店先。オペ室花道より火消し三蔵、客席花道より火消し五蔵が登場。続いてオペ室花道より火消し衆、一蔵、二蔵、六蔵登場。賑やかな花火の音。喧嘩が始まる。

長　太　おいおい、にいさんがた、花火が盛りだ。けんかなんかしてる場合じゃないぜ。

皆　場合じゃねえよな。友達じゃねえか。

皆、二階へ上がる。

唸り屋三味蔵、オペ室花道に登場。

三味蔵　〜はあー！　花火だ花火だ！　花火だ花火だ！　花火だ花火だ！

三味蔵、オペ室花道より舞台へ。

三味蔵　ドーン！　たまやー！　ドーン！　鍵屋！　ドーン！　ラッパ屋！

三味蔵、奥花道へ退場。長太、火消し衆たち、客席花道より登場。

長　太　さあ、お馴染み元禄堂だ。潜伏中の赤穂浪士はどこへ消えたか。とっ

ときのネタが書いてあるよー。

元禄堂の台詞の間に、奥花道より笠をかぶった侍が登場。少し遅れて奥花道よりやはり笠をかぶった二人組が登場。南京玉すだれの芸人の格好である。三人は縁台に座る。侍は中田貞四郎、南京玉すだれは大石すず、大野黒兵衛である。いずれも赤穂の者たち。

一　蔵　おい、元禄堂、ちょっとだけ中身を教えろ。
二　蔵　そうだ、ケチるな、赤穂浪士はどうなった。
五　蔵　怖くなって仇討ちやめたんじゃねえの。
三　蔵　俺もそう思う、吉良の家来はつええ奴を集めたらしいからな。
一　蔵　だが幕府は仇討ちを応援してるって言うぜ。吉良の野郎が評判悪いからよ。
二　蔵　早くやってくんねえかな、花火みてえにスカッとすんのによ。
五　蔵　六さんの意見は？
六　蔵　俺はいいよ。

一蔵　で、どうなんでえ元禄堂。

長太　では、ちょびっとだけお教えしよう。

皆　おうっ。

長太　まず、赤穂浪士の仇討ちに関しては将軍も幕府のお偉いさんも学者先生もその態度を決めかねている。この武士道乱れた元禄の世の中に主君の仇を討つとはあっぱれなと支持する意見、はたまた、仇を討つということはすなわち浅野の殿様を切腹させた幕府に対する異議申立て、将軍への反乱であるとして即刻ひっとらえ断罪にせよと主張する意見、さらには殿様への忠誠心などもともと奴らにはないのだ、名をあげてよその殿様に拾ってもらおうとする腹黒くも情けない小市民的集団就職活動にすぎなーい、という意見までである。

一蔵　で、ほんとのとこはどうなんだい。

長太　わが元禄堂の、細心かつ詳細、たとえばいまをときめく成田屋団十郎の話だ、大江戸の飾り海老と称されるその人の、生まれ故郷は成田山新勝寺から誓い幡谷村だ、村の真ん中に井戸がありましてな、十年前にとある娘さんがおっこちて死んだんだが、以来、飼っていた蘭丸という犬が毎日、井戸端でクンクン泣くというじゃないか、その蘭丸が

ゆうべは何を食ったかということまできっちり調べあげるわが元禄堂の調査能力をもって出した結論は、

皆、固唾をのむ。

長太　わからない。

六蔵、倒れる。

一蔵　おい、どうした。

二蔵　どうした、六さん。

五蔵　息とめてたんだこいつ。

三蔵　おい、ひどいじゃねえか元禄堂、思わせぶりばっかりしやがってよ。

二蔵　そうだどうなんだ。

一蔵　はっきりしろ。

五蔵　六さんもなんかいいなよ。

六蔵　俺はいいよ。

長太　あわてちゃいけねえな、にいさんがた。幕府も結論が出てねえように、赤穂浪士本人たちも結論がでてねえ。だからこんなに時間がかかってんだろうよ。

一蔵　とするとなんだあ、仇討ちはしねえってこともあるのかい。

長太　あるね、連中の大将は大石内蔵助。昼行灯とあだ名がついたずいぶんぼんやりしたお人らしい。仇討ちなんぞより、女の尻のことを考えてるんじゃねえかな。

五蔵　やっぱりな。

二蔵　情けねえな。

一蔵　赤穂浪士の横っ面ひっぱたいてやりてえぜまったく。

長太　というわけで目新しいネタはねえんだが、今週号は特別企画、赤穂の塩の作り方。ご家庭で手軽にお塩がつくれちゃうよー。

二蔵　（オペ室花道を見て）おい、見ろ、浴衣のねえちゃん。

五蔵　六さんナンパ。

六蔵　俺はいいよ。

火消したち、歓声を上げながらオペ室花道へ退場。

長太、塩の作り方を売り込みながら追って退場。

黒兵衛　ずいぶんですな。

貞四郎　ずいぶん言われました。

すずず　もう我慢ができません。

すず、おもむろに立ち上がり、

すずず　ウオーッ。

縁台に戻り、

すずず　失礼しました。腹が立ってならないのです。父をひどく言われたことが、いえ、あんなふうに言われても仕方ない父が。

黒兵衛　すず殿（ベロベロバーな顔をして）ベーッ。

すずず　いつまでも子供扱いをしないでください、おじさま。いくらオシメを替えたことがあるといっても、すずはもう十六です。

黒兵衛　いや、これは、すまん。赤穂から南京玉すだれに身をやつしての旅だ。少々疲れた。

貞四郎　長旅、ご苦労さまでございます。お二人がお見えになられて、成就の日を江戸で待つ者、大変、心強く思っております。

すず　どうなのですか、江戸の様子は。浪士たちはいかに暮らしているのですか。

貞四郎　ハハハ、ご安心くだされ。言うまでもなくその日に向けて準備を着々と進めております。ある者は大工に身をやつし吉良邸の図面を手に入れようとし、またある者は火事のたびに屋根にのぼり吉良の動きを探っております。

すず　そのほかの者は。

貞四郎　えー、ある者は八百屋になり大根を売り、ある者は金魚屋になりデメキンなんかを売っちゃっておりまして、その日が来るのをキンギョーえキンギョーなんて言いながら待っておりまして、ハハハ。

すず　ほかの者は。

貞四郎　ハハ、もういいではありませんか。

すず　よくありません、ほかの者は。

貞四郎　（深呼吸して）スリ、泥棒、かっぱらい、ゆすり、たかり、博打打ち、歩いてる人を後ろからワッとびっくりさせてその隙にお財布とっちゃう商売、でもみんなそういうことしながらちゃーんとその日が来るのを……

すず　ほんとのことを言ってください。

貞四郎　ハハ、なんかやだなあ、マジになっちゃって。全然、たいしたことじゃないのよ全然、いやひと月ぐらい前にみんなを集めたのね、あなたのパパが。で、どういうことだったかっていうと、去年一人ずつ押した血判を返しなさいってことなわけ、仇討ちに命を賭けるぞーっていう約束手形ね、で、大石さんとしてはさ、決心の固いやつだけ残そうと思ったわけよ、人数半分ぐらいにするつもりでね、そしたらあらあらびっくり、僕返す、僕返すってみーんな返しちゃったのよ、ハハハ、返さなかったのあたしだけ、やだあ、ねえこんなことある？　あるあるある？　もうやだあ、なんてもうあたしびっくりしちゃって、申しわけございません！

屋形船から都々逸が聞こえてくる。

貞四郎　うるさいよっ。

黒兵衛　大石は。あの昼行灯は何をしている。

貞四郎　会合のあった晩、飲んだくれ、誰もいない川原で叫びました。「赤穂浪士、かいさーん」って。

すず　（立って）気分が悪くなりました。お水をもらってきます。（奥花道へ退場）

黒兵衛　あ、すず殿、私が。……気を落とすな、貞四郎。お前のせいでも大石のせいでもない。サムライの時代は終わったということだ。

貞四郎　しかし……クク。

黒兵衛　ベーッ。

貞四郎　ひゃっ。

黒兵衛　馬鹿の一つ覚えですまん。

黒兵衛、すずを追って奥花道から退場。貞四郎、一人残り頭を抱える。

オペ室花道にスカピン、八、登場。

スカピン　いいか、八つぁん。喋りは俺と一八に任せておめえはうなずいてりゃいい。

八　うん。

スカピン　一八がおめえのかたき。強欲な金貸しという役回りだ。

八　うん。

スカピン　いいか、これは狂言なんだからよ。本気になんじゃねえぞ。

八　うん。

スカピン　金を集めたら、一八を追っかけるふりして逃げろ。

八　うん。

スカピン　あそこに縁台がある。悠然とかまえて座ってろ。悲痛な志を背負った男みてえにな。

八　うん。

スカピン　おもしれえなあおめえ、うんしか言わなくてよ。

八　うん。

スカピン　人生で一番大事なことは？

八　うん。

スカピン　ついてんだってよおめえは。頼んだぜ。（オペ室花道に退場）

八　うん。

八、貞四郎のとなりに腰かける。貞四郎と目が合い、

八　うん。

貞四郎　暑いですね。

八　うん。

貞四郎　職人さんですか。

八　うん。

貞四郎　立派な生き方ですよね、それはそれで。いまの時代、サムライなどよりスジが通っているかもしれない。

八　うん。

貞四郎　うん。

茶屋亭主花吉奥花道より登場。八は懐から豆絞りの手拭いを出し、しきりに汗を拭く。

花　吉　お客はん、なんかつめたいもん差し上げましょか。

貞四郎　いえ、結構です。連れの具合はどうですか、南京玉すだれ。

花　吉　ああ、お顔洗っていなはりますわ。お江戸は特別な熱もってはりますさかい、よそからきはると脳をやられるんですわ。

貞四郎　そうだ、江戸の侍全員がやられたのだ。亭主、勘定を。

花　吉　へい。六十四文、いただきます。

貞四郎、財布を出し金を出す。と、これも豆絞りのガラ。

貞四郎　ごちそうさま。

花　吉　おおきに。

花火が打ち上がる。貞四郎、八、思わず立ち上がり舞台前方へ。

その際、貞四郎は縁台に財布を置いてしまう。

貞四郎　見事だ。人も、あのように散りたいな。

八　うん。

と、いいながら八は手拭いを足下に落とす。

スカピン　（オペ室花道に現れて）八、行くぞ。

八　うん。

オペ室花道から人の声。八、あわてて縁台へ。自然に貞四郎の財布を懐に入れる。

スカピン、つづいて火消したち、元禄堂が登場。

貞四郎、一瞬縁台に目をやるが、財布がないので足下を。八の手拭いを見つけほっとして懐にしまう。

スカピン　というわけでその八という魚屋は女房の仇を討とうと金左エ門という金貸しを追ってるってわけよ。

一蔵　そりゃひでえ話だなあ。

長　太　八の女房に惚れた金左エ門。世間知らずの八を博打の道に誘い込み、金を貸すだけ貸して、借金のカタに女房と店を奪った。それだけならまだしも、女房をもてあそぶだけあそぶとポイと捨て、吉原は最低級、蕎麦一杯の銭で身をひさぐという羅生門河岸に売り払った。

皆　ひでえなあ。

スカピン　あ、八、八じゃねえか。どうしたこんなところで。そうか、花火見物に出てくるんじゃねえかと思って、金左エ門を待ってやがるんだな。

八　うん。

スカピン　聞いたか野郎ども。この人出から一人の人間を見つけるのは砂浜で一つの砂粒見つけるようなもんだ。だけど、八は待ってんだとよ。

皆　ああっ。

スカピン　女房はどうした、いくら女郎になっても生きてりゃいつかまた、もしかして死んだのか？

八　うん。

スカピン　女房が死んだ、この世に神も仏もあったもんじゃねえ！

皆、「がんばれ八つぁん」「俺が味方だ」などと口々に言いな

から八にかけより、小銭を渡したりする。

スカピン　そうだ、銭でどうなるわけでもねえが、俺たちにできるのはそれぐらいしかねえ。お賽銭だと思って、恵んでやってくれ。

八、オペ室花道を見て殺気立ったように立つ。このあたりですず、黒兵衛奥花道より登場。

スカピン　どうした八、あっ。

オペ室花道から一八登場。どこで手に入れたのかキンキラの金貸しの着物。

スカピン　金左エ門なのか！

八　うん。

皆、息をのむ。八、立つ。

一八　誰だ、私の名を呼んだのは。（ジロッと見回し）聞き違いか。
スカピン　待ちやがれ、そこの八に見覚えはないか。
一八　知らんな。（行こうとする）
スカピン　覚悟だ！

八、脇差を抜く。

一八　言いがかりをつけるな、お前は自分から金を貸してくれと頼んだのだぞ。
スカピン　策略だ、てめえははじめからそのつもりで。
一八　ならば仕方ない、受けて立とう。

一八、刀を抜く。

一八　元は武士、柳生を学んだ、結果は見えているな。
スカピン　なんだって、八、この勝負にみんな金を賭けてくれ？　博打で駄目に

なった俺の人生を、最後の博打で終わらせたい？　おい、聞いたか、賭けてやれ。

皆、熱くなって口々に賭ける。スカピン、手拭いの中に金を集める。

スカピン　さあ、張った張ったもういいかいいか、よし、勝負！

すず　貞四郎殿！

貞四郎　はっ（前へ出て）柳生に脇差では勝負にならん。魚屋、助太刀いたす。

一八　たーっ。

貞四郎　うわー、ちょっと待って、ちょっと待って、なし、なし、そういうのなし。（といいながら腰が抜けて逃げ惑う）

何がなしだ。お覚悟を。ターッ。

寝転がった一八のノドに刀を振り下ろそうとするとき、

五　蔵　この女、何者だ、芸人のくせにお侍に命令してよ。
三　蔵　もしかしてこいつら。

おもむろに黒兵衛、南京玉すだれを歌い踊るがひどい。

一　蔵　やっぱり、こいつら！

すず、思い切り明るく南京玉すだれ。皆、手拍子拍手、納得。

す　ず　情けない……
黒兵衛　すず殿……！

貞四郎、逃げようとする一八を捕まえて、

貞四郎　魚屋、やれっ！
一　八　ちょっと待ってくれ、お侍さん。
貞四郎　なんだ。

八　こいつを殺してなんになる。

貞四郎　お前のかたきだろう。

八　そりゃそうだが、俺はいま思ったんだ。大きい花火はとーちゃんで、小さい花火はボンボンで、それなら俺は線香花火みてえなもんだが、いまこいつにカタをつけたら、気が抜けてその線香も落ちちまう。この悔しい気持ちを人生の火薬にして、いつかあんなでっけえ花火になるのよ。俺はえれえお侍じゃねえから武士の情けなんて言葉はつかえねえが金左エ門さんよ。

一八　はいっ。

八　江戸っ子の情けだ、さっさといきな！

一八、手を合わせオペ室花道に退場。

一蔵　八つぁん！

皆、かけ声。拍手。

八　さあ、スカピンいこうぜ。

スカピン　だけどそっちは川だぜ。

八　かまわねえ、江戸っ子は、いつも心がほてってんのよ。

八、ロビー花道へ。ドボーン。八、ジャボジャボと花道を歩いていく。

追ってスカピンも退場。皆、いっそう大きなかけ声をかけながら奥花道へ退場。

すず、黒兵衛、貞四郎が残る。

貞四郎　八つぁん、大石内蔵助より立派な名前だ。

貞四郎、ジャボジャボとロビー花道へ。

黒兵衛　おい、貞四郎、待て。

すず　いいです、止めなくて。確かに私の父より立派。

黒兵衛　しかし。

すず　おじさまは黙って、玉すだれの練習を。

黒兵衛　はっ。

音楽ＵＰ。暗転。

オペ室花道より三味蔵登場。

唸り屋三味蔵、恋の街吉原の一席

三味蔵　おーう！　すげえぞ！　すげえぞ！　ここは吉原だあ！　ヒューヒューー！（三味線）

皆様方、場面変わって吉原でございます。私をひとりにしないで……

さあ、ヒューヒューご一緒に！　おっ！　すげえぞ！　すげえぞ！

ここは吉原だあ！

はい！　ヒューヒュー！　ありがとう！（三味線）

〜ここは吉原夢の里

花の遊女が三千人
お金ある人ウハウハで
少ない人でもそれなりに
笑いが止まらぬ夢の国

はっはっはっは、こりゃ愉快！　はっはっはっは。はっはっはっはっは。

スカピン、八、一八、オペ室花道から登場。三味蔵も加わり
オシャレに歌う。

三　人　♪よしわら　町に灯がつくころ　どこからともなく人が集まってくる
♪おいらん　僕の気持ちはランララン　恋の提灯ゆらゆらゆれている

三味蔵歌が終わるとともに、奥花道へ退場。

スカピン　ゆれてるのは提灯ばかりじゃねえ。（ずっしり金の入った手拭いをぶ

ら下げて）見ろ、ずっしり3両2分の金で狸のきゃん玉みてえにゆれてるぜ。

八、一八、かしわ手。

一八　しかしうまく行きましたなあ、あたし死ぬかと思いましたけどね。

スカピン　八つぁん、おめえはてえした役者だぜ。狂言にケリをつけたあのタンカの時なんぞ、空の花火はまるでてめえのために上がっているように見えた。

八　気持ちよかったあ。

スカピン　というわけで分け前だ。てめえらに一両ずつ。なあ、きっちり一両、気持ちいいねえ。

八　おいおかしいじゃねえか、稼いだのは三両二分だろ。残りの二分はどうした。

一八　ちょっとお、あたしが持ちかけた話でげすよ、原作料。

スカピン　キャスティングと監督は俺なんだよ。

八　主演男優料は。

スカピン　いけねえな八つぁん、花形役者が金の話なんかしたらファンが泣くぜ。

八　そうかなやっぱり。

呼び込みの声。

呼び込み1　（声）さあ、いらっしゃいいい子いますよ。

呼び込みの声。

呼び込み2　（声）さあ、旦那、よってらっしゃい花魁のご指名だよ。

スカピン　さてどこ繰り込むとすっかなあ。

八　目移りしちゃうよね。

スカピン　おい一八、てめえ太鼓もちなんだからいい店しってんだろ。

一八　わかってないねスカピンの旦那。あたし太鼓もちといっても野だいこでげすからね、吉原の座敷なんか出ないんでげすよ、道歩いててちょっと金もってそうな人なんか見つけましてね、こんち、これまた、こ

のやろっ、憎いよっ、かなんか言ってとりまいてごちそうになったりするだけでしてもう自分で喋ってて情けなくなります。もうこんな人生いやっ。

スカピン　置いていこうぜこいつ。

スカピン、八、奥花道に行こうとする。

一　八　あ、ちょっと、旦那。

オペ室花道から遊女屋「三浦屋」の遊女上がりの遣り手、お熊登場。風呂敷包みでも抱えて用足しの帰りといった風情。

お　熊　あらあらたいへん、もうびっくり、きゃー。

八　なんだあ。

お　熊　どうしたのどうしたのどうしたのよこんないい男が三人もそろっちゃってもうお熊びっくり。もうすこしで笛吹いて呼ぼうかと思っちゃった岡っ引き。

スカピン　どうしてだい。

お　熊　こら、ばっくれるんじゃないわよ恋泥棒。

３人、ウヒャウヒャと喜ぶ。

お　熊　ああ、残念、もったいないことした、あたし去年まで花魁やってたんだけどさ、引退したのね、いまそこの遊女屋でお世話のおねえさんやってんだけどもう少し花魁つづけてたらあんたたちみたいなお客がとれたのにぃ。

３人、ウヒャウヒャと喜ぶ。八の腕をとって奥花道へ。２人もついていく。

お　熊　ほらつかまえたもう離さない。あんたたちみたいなの逃がしたらあたし花魁たちに憎まれちゃうわ。あの子たちも寂しいのよね、お金じゃなくて心がほしいの、一度惚れちゃったら何でもするのよ、もう凄いわあたし言えない。

３人、ウヒャウヒャと喜ぶ。

お　熊　はい、３人様おあがり。システムの説明してあげて。

お熊と三人、奥花道から二階へ。オペ室花道より貞四郎登場。

貞四郎　何ということだ。あの侍の心を持った立派な魚屋がこんな低俗な遊廓へ来るなんて。しかも憎っくきかたき、金左エ門とウヒャウヒャと談笑している。俺は大変心が混乱しているが、これもあの男の心の広さということか。まあそれはそれとして今後の俺の行動だが、俺は遊女を買ったことなどない男であって、魚屋のあとをつけていくと遊女屋へ上がってしまうということになってしまうわけであり、まあ、そういうことに興味がないわけではないのだがいままでなんというかきっかけがなく、俺を堅物だと思って誰も誘ってくれなかったということで、

その間に、お熊登場。貞四郎の腕をとり奥花道より二階へ。

そう思い悩んでいる間にお世話のおねえさんが俺の腕をグングンと引っ張っていき、これはもういまさらあがらないよなんて言ったらちょっと野暮かな、なんて思っちゃったりもなんかしたりしちゃって。

お　熊　お一人様、お上がり。

貞四郎　まあ、いいか。

お熊、貞四郎、二階へ。客席花道より番頭の藤吉に連れられてスカピン、八、一八登場。

藤　吉　さ、こちらでございますお客様。ガラガラッ、いいお部屋でございんしょ。ここは昔、フランシスコ・ザビエルが、

3人、藤吉の次の台詞に集中する。

藤　吉　ごゆっくり。（退場しようとする）

スカピン　おい、どうしたんだよザビエルが。

藤　吉　いっちまったら野暮ですよ。（退場）

スカピン　デタラメいうんじゃねえや馬鹿野郎。

八　しかし吉原ってのはずいぶんめんどうくせえとこだなあ。一両もありやたっぷり遊べるかと思ったら初回は台の物とって酒飲んで花魁がちょっと顔見せにくるだけってえじゃねえか。

スカピン　もっと安直な女郎屋にすりゃよかったぜ。あれだけの芝居を打ったんだ。女の布団の中で明け烏でも聞かなきゃ気がすまねえ。

一　八　紀ノ国屋文左ェ門あたりの金持ちになりゃ無理も聞くんでしょうがな。

八　おい、赤穂浪士はどうでえ。

スカピン　赤穂浪士？

八　ただの魚屋の仇討ちでもあれだけ盛り上がったんだ。俺たちが赤穂浪士ってことになったら、遊女屋あげての殿様待遇ってことにならねえかな。

スカピン　なるほど、そいつは見世の宣伝にもなるしな。赤穂浪士と同衾した花魁なんぞと言ったら次の日から引っ張りだこだぜ。

一八　しかし店が信用しますかね、バレたら追い出されちゃうでげすよ。
スカピン　心配すんな、八つぁん、主演男優賞だからよ。
八　ものは試しだ、ちょっくら駄々をこねてみようぜ。

奥花道より、お熊登場。

お熊　ガラガラッ、あらあらすいません、待ちぼうけくわせちゃっていい男に、花魁お化粧してんのよ念入りに、それまであたしのお酌で我慢して、はい。
八　この酒も、あと何杯のめることやら。
お熊　あらいいのよ何杯でも飲んで。追加とります？
八　いやそういうことではない。実は我ら、こんなりはしているが、胸に志のあるものでな、
お熊　はい？
八　赤穂浪士だ。金はないがのちのち歴史に名を記す身、ここは一つ多少の無理をきいていただいてだな、
お熊　藤吉、藤吉、

奥花道より藤吉登場。

藤吉　ガラガラッ、へいっ。

お熊　いままでに赤穂浪士が何人来たかおしえておやり。

藤吉　へいっ（懐から帳面を出して）。おとといが七人、ゆうべが十五人今晩も今までに六人さんほどいらしてますな。

お熊　考えることはみんないっしょだねえ、いい思いをしようと思ってこの吉原は赤穂浪士の偽者があふれかえってるのさ。どこの店もこまっちまってね、そういうのが来たときには、（手を打って）おーい、赤穂浪士のお帰りだよ。

「へいっ」という声と共に奥花道から若い衆、一吉、二吉、三吉、五吉、六吉登場。

一吉　ガラガラッ、さあ、大門口の番所までご同行いただきやしょう。

二吉　ちょっくら痛い目に合っていただきやすぜ。

一八　（八に）だから言ったじゃないでげすか。（藤吉に）番頭さんなんとかなりませんかね。

藤吉　弱りましたねえ、遊女屋が揃って決めた決まり事ですから。

一八　そこをなんとか。

お熊　銭をお出しよ。

スカピン　金ならさっき出したじゃねえか。

お熊　目つぶってやろうって言ってんだろ、少しは色をつけなよ。

スカピン　もうねえよスカピンだよ。

一八　じゃああたしがとっておきのやつを出しましょ。

お熊　面白いじゃないか、やってみな。

一八、若い衆がはやしたてる中、芸を披露するが、

藤吉　なんだそりゃ。

一八　ザビエルの真似。

三吉　ざけんじゃねえよ。

五吉　火に油だぜ。

と、若い衆、一八をいたぶる。八、懐から豆絞りを出してたきつけ、

八　さあ、懐の中はそれだけよ。番所でもどこでも連れてってくんな。

お熊　お望みだよ、連れてってやんな。

若い衆、「さあこっちきやがれ」などと言いながら、八の襟首をつかんで引っ立てる。その間に藤吉、豆絞りの中を確かめる。

藤吉　あっ。

お熊　どうしたんだい。

藤吉　赤穂浪士の血判状だ。

お熊　ええっ？（血判状を見て）じゃああいつは本物……

スカピン　八つぁん、おめえ赤穂浪士だったのかよ。

八　……無礼だよ。

若い衆　失礼しましたっ。

若い衆、あわててひれ伏す。

スカピン　すげえよ、すげえよ八つぁん、俺もう感激だよ。

一　八　大変なご苦労でしたな浪士様、いままでこんなに薄汚い魚屋に身を落とし、馬鹿の上にも馬鹿なふりをして、ククククク。

お　熊　申しわけございません、このお詫びは幾重にも。

八　うんうん、じゃああの無理聞いてほしいんだけどさ。ほらあの先の短い命だから、手っ取り早くいきたいのね裏返すとかそういうんじゃなくて。

藤　吉　もちろんでございます、吉原の掟を曲げてでも。

八　うんうん、じゃあのこの人たちもそうしてあげて。なんか貧しい町人だけど僕のだいじな友達だから。

スカピン　八つぁん、うれしいよ八つぁん。

お　熊　（手を打って）さあご案内だよ、奥の一番いいお部屋に。

若い衆、藤吉、お熊、三人の機嫌を取りながら奥花道へ。スカピンと一八はうれし泣きをしながら八を誉めたたえている。

客席花道より貞四郎登場。

貞四郎　ガラガラッ、ちょっと八つぁん、その血判、あたしのだよ、あたしが赤穂浪士だよっ。

六　吉　ピシャッ。

皆、奥花道へ退場。貞四郎一人が残る。

貞四郎　なんなんだあの八つぁん、立派な侍かと思えばでたらめ野郎の嘘つき。成り行きまかせの大馬鹿者。恐ろしいところだ江戸とは、みんながオツムをやられている。急がなきゃ、あの血判状取り返さなければ大変なことになる！

貞四郎、八を追おうとする。と、オペ室花道より花魁、喜多川登場。

喜多川　ガラガラッ、ピシャッ。早く座って。

貞四郎　え？

喜多川、貞四郎を押し倒し床で抱き合うような格好になる。

貞四郎　うわぁっ。

奥花道より藤吉登場。

藤　吉　喜多川さん、喜多川さん、ガラガラッ。あ、ごめんなさい。ピシャッ。どこいっちゃったんだろう花魁、こっちは忙しいんだ、赤穂浪士のご機嫌とりで。出てきてくれよ、喜多川さん。

藤吉奥花道に退場。

貞四郎、体を離そうとする。

喜多川　あ、もう少しそのまま。いやな旦那から逃げてきたとこなのよ。見つかったら連れていかれちゃうわ。あんた名前なんていうの。

貞四郎　田中貞四郎。

喜多川　バッチリだわ。サシスセソのつく人とはあたし相性がいいの。あたしを買って。ちょっと色つけりゃなんとかなるさ。

貞四郎　だめだよ、俺にはやらなきゃいけないことがある。失礼。

喜多川　ああ。もう何度も聞いたわその台詞。あたしと恋仲になって、じゃあ身請けして夫婦になってよって話を持ち出すと男は最後には決まってそういうの。もちろんウブだったころはあたしもグッときたわ。ああ、あなたにはやらなきゃいけないことがあるのね、あたしは耐えなきゃいけないのね。だけど何度もそういうことがあると最近はこう考えるの。ちょっと待てよ兄さん、やらなきゃいけないことがあるっていうけど、恋した女を幸せにするのはやらなきゃいけないことじゃないってわけ？　すると男はこういうわね「何だと花魁のくせに生意気な」「ふん、花魁だって人間よ」「うるせえこのアマ、ドンガラタッタタ」これ茶瓶を投げた音。「ひどいわスーさん、遊びだったのね、シュワー」これ蒸気ね。「二度とてめえなんか買うか」「上等だよ、おと

といおいで」「ガラガラッ、ピシャッ」ああ、あたしはどうすりゃいいのよ貞ちゃん。

貞四郎　苦労しているな、喜多川。

喜多川　あんたはちがうよね。そんな不実な男じゃないよね。

貞四郎　しかし会ったばかりだぞ。俺とお前はまだ、

喜多川　恋に落ちるなんて一秒で足りるのよ。

音楽。

貞四郎　なんだ、この感じは。

喜多川　でしょ、あんたを一目見た時から思った。

貞四郎　心が熱いぞ。そのくせなんだか、とても切ないぞ。

喜多川　初めてなの？　これが恋よ。

貞四郎　侍には女は邪魔だと思っていた。刀をさびつかせる元だときいていた。だから避けてきた。恋など一生すまいと思っていた。

喜多川　もったいないわそんなの。せっかく翼があるのに鳴いてるだけのカラスみたい。

貞四郎　好きだぞ喜多川。

喜多川　あたしも好き。

貞四郎　どうすればいい。教えてくれ。

喜多川　強く抱いて。力一杯。

貞四郎　そうすればこの切ない気持ちは消えるのか。

喜多川　消えないわ。でも人間にはそれしか思いつかないもの。

貞四郎　抱くぞ喜多川。

喜多川　いいの？　やらなきゃいけないことは。

貞四郎　馬鹿をいえ。いまの俺には、目の前だ。

音楽ＵＰ。暗転。
二階に長太登場。

長　太　さあ、大変だお立ち会い。花の吉原に赤穂浪士が現れたよ。神田は貧乏長屋に住む、馬鹿で鳴らした棒手振りの魚屋、その正体が赤穂浪士だ。身を潜めること五百と二十日、これが浮世の見納めと花の吉原に現れた。さあいよいよだ、討ち入りだ、赤穂浪士が現れたよ！

舞台にスカピン、幸、行商の野菜売りのおかね登場。

幸　とすると、うちの人、赤穂浪士だったのかい。

スカピン　そうだよ、お幸さんも知らなかったのかよ。

幸　ちっとも知らなかったよ。十年前に会ったときはたしかにただの魚屋だったんだけどさ、いったいいつから赤穂浪士なんかになっちまったんだろう。

スカピン　敵をあざむくにはまず身内からっていうからなあ、もしかすると十年前から赤穂浪士だったのかもしれねえぞ。

おかね　やっぱりな、

スカピン　お、おかねさんは気づいてたのかよ八つぁんの正体に。

おかね　あたしがここに越してきた一月前のことだよ。あの男、酔っぱらって屋根に上ってよ、飛んでくカラスに小便ひっかけようと思って、チンチン出しながら屋根から飛んだんだよ、そりゃカラスじゃねえものとべねえもの、ガラガラスットンと屋根から落っこちてよ、痛え痛えって小便垂れ流してよ。

幸　ああ、あの怪我そうだったの、あたしには喧嘩したって言ってたのに。

おかね　こりゃてえした大馬鹿だと思ったけどよ、ただの人間になんの目的もなくあんな馬鹿は出来ねえ、ただもんじゃねえと思ってたのさ。

スカピン　そうよ、八つぁんは志のある馬鹿だったのよ。

オペ室花道から八登場。

おかね　あ、八つぁん。（かしわ手を打つ）

八　おいやめろ婆あ、仏さんじゃねえんだからよ、まったく困るぜ年寄りは、老い先みじけえもんだからなんでもかんでもおがみやがってよ。おまえさん。（八の前に土下座して）お役目ご苦労様でございます。

幸　（スカピンに）てめえこいつになんかいったか。

八　あたりまえじゃねえか、てめえもこれから大切な時期だ。せめて女房ぐれえには正体を明かしておかねえとよ。

スカピン　馬鹿野郎、だからいったじゃねえかゆんべのことは。

八　俺が言わなくたって瓦版屋が大騒ぎだぜ。いずれは耳に入ったこと

よ。

八　だからわかんねえかな、あの血判状は俺んじゃねえんだって、ふと気がついたらあったんだよ懐ん中に。

スカピン　いいんだよいいんだよ水くせえぞ八つぁん、友達だろ、心を開け、そしておめえの胸の苦しみを共に分かち合おうじゃねえか。

八　苦しみなんてねえんだって。みろよ腹ん中を、なんにもねえぞ。べーッ。

幸　まだ馬鹿のふりをしてる。

おかね　たいした赤穂浪士だねえ。（かしわ手）

八　おがむんじゃねえっ。

オペ室花道からお直登場。

お直　八つぁん、赤穂浪士なんだって。

八　うん、赤穂浪士。

お直　やっぱりそうだったの。ごめんね、きのうは信じなくて。

幸　なんだいおまえさん、お直ちゃんには正体明かしてたのかい。

スカピン　いいじゃねえかお幸さん、女房だから言えねえってこともあるんだぜ。

おかね　そうだよ。あんたに心配かけまいとする八つぁんのやさしささ。つまんねえ焼き餅やくもんじゃねえよ。

幸、おもむろに奥花道に走る。

スカピン　おい、どうしたんでえ。

幸　あの人に、好物のワカメの味噌汁つくってやるんだよ。あと何度つくってやれるかしれないだろ。（退場）

スカピン　お幸さん……！

おかね　葱もいれてやれー。おまけしてやっからよー。

おかね、幸を追って退場。

スカピン　豆腐も入れてやれー、俺のおごりだー、

スカピン、幸を追って退場。お直、八の胸に顔を埋める。

八　お直ちゃん、いいのかよこんなことして。

お直　だってきのう言ったでしょ、八つぁんが赤穂浪士だったら胸に飛び込むって。

八　そりゃ言ったけどさ、見合いはどうした。

お直　駄目。半時も遅刻したの。姉さんがドブに落ちて。

八　ああ、

お直　風車の弥助さんが助けてくれたわ。それで二人は仲よくなったみたい。

八　そうかい。

お直　弥助さんはいい人よ。でもあたしはいい人だけじゃ物足りないの。男の人と暮らすって夢と暮らすようなものだとずっと思ってた。いつか、何かをやってくれる人じゃなきゃいやだわ。

八　ああ、

お直　八つぁん、いい匂いがする。

八　あ、ごめん、鰯くせえか。

音楽。

お　直　違うよ、男の人の匂い。赤穂浪士の匂い。もう少し、こうしていさせて。

明かりは二人に絞られる。八、お直を抱く。二階に八の河岸仲間の魚屋、仲介人、漁師たち、幸、おかね、スカピン登場。

一　太　おーい、八つぁん、あんた赤穂浪士なんだってな。

二　太　魚河岸はあんたの噂で持ちきりだぜ。

三　太　あんたは俺たちの誇りだよ。

五　太　なんか偉くなっちゃったけど、これからも飲みに連れていってください。

六　太　すげえぞ八つぁん。

五　太　がんばれ八つぁん。

八　ありがとよ、頑張るぜ。なに、赤穂浪士だからって気取ったりはしね

えよ。いままでどおり友達だぜ。

幸　おまえさーん、味噌汁できたよー。

おかね　いっぺえ葱もいれたぞーい。

スカピン　つるんつるんの豆腐もだー。

八、お直から離れ、

八　さあ、かえんな、出戻りの姉が心配するぜ。

お直　八つぁん、あたしを好きにしていいんだよ。あんたあれほどあたしにいやらしいことしたがったじゃないか。

八　馬鹿いいな、赤穂浪士が、それエサにして、女口説けるかい。

八、奥花道に退場。

お直　馬鹿野郎、かっこいいじゃんかよー。

お直、オペ室花道に退場。弥助オペ室花道より登場。スタス

タと歩き舞台で止まり、客席花道へ退場。

半月後のお花茶屋二階座敷、夕刻。貞四郎、つづいて、すず、黒兵衛が奥花道より登場。

すず　貞四郎殿、半月もどこへ姿を隠していたのですか。ずいぶん探したのですよ。

貞四郎　すみませんでした。個人的な事情がありましたもので。

すず　この期に及んで個人的な事情とは驚きます。夏から秋へ、状況は動いているのですよ。何も知らないあなたは、季節はずれのあの風鈴です。頭の中がチリンチリンと鳴っているのではありませんか。

黒兵衛　すず殿、言いすぎでは。

すず　いいんですおじさま、肝心なときにこの人はいないんですから。どうせ自棄になって女でもこしらえたのでしょう。

黒兵衛　まあ、おまえもいかんのだぞ貞四郎、血判状をなくしたというインギン無礼な手紙をよこしたまま何の連絡もよこさんで。

貞四郎　すみません、すみません、すみません、何度でも言っちゃいます。合

わせる顔がなかったもので。

すず　まあいいわ。許します。状況はいいほうへ進んでいるのですよ。

奥花道より花吉登場。

花吉　これはどうも毎度おおきに。ゆっくりお話がしたいというご希望やったけど、こちらのお部屋でよろしかったやろか。

黒兵衛　大変結構です。無理を言ってすみません。

花吉　いやあ、こちらのほうこそ大歓迎ですわ。夏が終わって人通りが少なくなりましたやろ、大川の色も変わって花火の人出がまるで夢のようですわ。つこうてもろって座敷の畳も喜んでます。どうぞご遠慮なくごゆっくり。（退場しかけて）ああ、玉すだれ、上手になりましたん？　あとでまた是非見せてください。見物のお客、この花吉が集めまっせ。（奥花道へ退場）

黒兵衛、おもむろに立ち上がり奥花道へいこうとする。

すずおじさまどちらに。
黒兵衛ちょっと練習に。
すずいまさらなんですか覚悟をなさい。
黒兵衛はっ。（席に戻る）
すずそれより貞四郎殿に報告です。貞四郎殿。
貞四郎はい。
すず喜んでください。十数人の浪士の居場所を突き止め話をしたところ、討ち入り決行論が高まっているのです。
貞四郎そうでしたか。それは意外だ。でもどうしてでしょう、たった半月で。
すず原因は例のお調子者の魚屋です。あなたの血判状を手に入れて赤穂浪士だと言いふらした。もちろん最初はもってのほかだと思い探し当てて切り捨てようかとしたのです。しかし思い直しました。あの魚屋のおかげで瓦版が大いに我々のことを書き立ててくれ江戸中に討ち入り待望論が巻き起こっている。この状況がしばらく続けば浪士たちの士気も上がるのではないかと考えたのです。そして思い通りの流れにかたむきました。討ち入りに賛同する浪士もどんどん増えてくるでしょ

う。

貞四郎　大石殿も思い直したのですか。

すず　問題はそれです。父はまだ見つかっていません。ほかの浪士たちにも一切連絡をとっていないようです。まったく情けないことだ。

貞四郎　どういうおつもりなのでしょう。大石殿のお耳にも魚屋の件はとどいているはずなのに。

黒兵衛　それがわからんのだ。まったくあの昼行灯め。

風車売りの弥助奥花道より登場。

黒兵衛　なんだ、風車はいらんぞ、

弥助、どんどん歩き舞台先端へ。

貞四郎　どういうつもりだ、無礼だぞ風車売り。

弥助、３人のほうに向き座る。

貞四郎　……！　大石殿！

弥　助　よおっ。お前がここ入ってくのが見えたからさ。

す　ず　父上！　なんですか、その格好は。

弥助（改め内蔵助）　見りゃわかるだろ、風車売りだよ。

す　ず　大石内蔵助ともあろう人が情けなさ過ぎます。そう思いませんか貞四郎殿。

貞四郎　まあ、パッと見はそのような気もいたしますが、これも敵の目をあざむくご配慮。そのご苦労が忍ばれると申しますか……

す　ず　敵をあざむくならほかにいくらでも手はあるわ。よりによって風車売りなんて、すずは一瞬目の前が真っ暗になりました。

内蔵助　よく言うよ、南京玉すだれだってけっこう情けないぞ。

す　ず　これはですね、

黒兵衛　お前もそう思うだろう。旅立つとき、私はこの変装にずいぶん反対したのだが、どうしてもとすず殿が聞かなくてな。

す　ず　だからあの時も言ったではありませんか、芸人に旅はつきもの。女連れの旅も怪しまれずにすむのです。

内蔵助　ほんとかな。
すず　なんですか父上。
内蔵助　おまえ、単にしたかったんじゃないのその格好。
すず　何言うのよいきなり。
内蔵助　だってそうだろ、おまえ七五三の時、神社のお祭りに行って南京玉すだれに憧れてさ、うちのすだれバラバラにほぐしちゃってお母さんに怒られてビービー泣いたことあったじゃない。
すず　ないもんそんなこと。
内蔵助　あったもん。俺覚えてるもん。その時からしてみたかったんだろ、その格好。
すず　じゃあお父様だってそうでしょう、お休みの日には書や歌をたしなめばいいものを、このお父様ったら風車ばかりつくっていたのよ。お父様こそ敵をあざむくためなんかじゃなくて。
貞四郎　ちがいます大石殿は深いお考えがあって。
内蔵助　ああ、そうだよ、風車が好きなんだよ俺は。この格好で走るとぜんぶグルグル回ってすっげえ楽しいんだよ。どうせ変装するなら楽しいほうがいいじゃない、だからいいよ南京玉すだれだってさ。でも建前論

みたいな理由はやめようよ。僕、風車。君、玉すだれ。僕ら、楽しい。そういうことだよね。

すず　はい。

内蔵助　じゃあ解決。本題に入ろう。討ち入りの相談だろ。

黒兵衛　あいかわらず用無しの明るさだな、昼行灯。

内蔵助　江戸に来てももって生まれた性格はかわらんよ。さ、手っ取り早く言いたいことを言え。

すず　なぜ一月以上も姿をくらませていたのですか、浪士たちをまとめるお役目としてあまりにも無責任ではありませんか。

内蔵助　討ち入りはやめたんだ、貞四郎から聞いたろ。せっかく決めたのにまた話を蒸し返すのはいやだからな。きれいさっぱり終わりにするには俺が姿を消すのが一番だ。

すず　だからそれはなぜなのです、なぜ討ち入りはしないと。

内蔵助　建前論だからだよ。もう戦などありえない世の中になって久しい。それなのに俺たちは剣の腕を磨けと教えられてきた。主君には命を捧げてつくせと教えられてきた。幕府を支える精神論としては理解できても自分のこととなるとピンとこないのが実感だった。だが、こんどの

一件は、そのことを目の前に突きつけられたのだ。武士の建て前から言えば、当然、仇を討つということになる。だがほんとうの、ほんとうの胸のうちはどうなんだ。それを俺は、俺自身と浪士たちに問いただしたんだ。

すず　どれだけ恐ろしいことをおっしゃってるかおわかりですか父上。

内蔵助　わかってる。

すず　あなたはサムライそのものを否定しようとされているんですよ。

内蔵助　そうだ、俺たちはもうサムライじゃないんだ。

風鈴が鳴る。

内蔵助　まだ討ち入り論が優勢だったころ、浪士たちはさまざまな町人の姿を装い、江戸の町で暮らし始めた。それから一年。あるものは商売人として思いもかけず成功し、またある者は生涯の伴侶ともいうべき人と巡り会った。皆、武士であるより自由だと思った。その生活を深く愛してしまった。久しぶりに集まった浪士たちはお互いにすっかり変わってしまった顔つきをぶらさげて、最初は照れ臭そうにそして最後は

目を輝かせて土から這い出したツクシンボのように、キラキラ輝いた一年間のことを話したよ。だから俺は自分の心に正直になれと言った。お前たちは武士ではなくお前たちなのだと言った。黙りこくった。下をうつむいた。涙を流す奴もいた。そして貞四郎をのぞく全員が血判状を俺に返した。赤穂浪士は終わったんだ。

すず、立ち上がり奥花道に退場しようとする。

黒兵衛　すず殿。

すず　刀は宿においてきました。いまここにあったら、私は父を、いえ、大石という男を斬ります。

すず、行こうとする。黒兵衛、追おうとする。

すず　ひとりにしてくださいおじさま。宿にはちゃんと帰ります。

すず、奥花道に退場。

黒兵衛　知らなかったよ。そこまでお前が思い詰めたとはな。

内蔵助　がっかりしたか。

黒兵衛　いや、皆の気持ちを考えるお前らしいと思った。俺はすず殿の勢いに押され武士としての体面にこだわり、ついここまで来てしまったが、お前の建て前にこだわらぬ正直な決断には打たれた。すず殿は俺から説得してみよう。

内蔵助　ありがとう。頼むよ。

貞四郎　私も、ここまでのご決意とは存じませんでした。先日は酒の上のことゆえ、一時的なご感情かと思っていたのです。しかし今日のお話を聞き、かえって潔さを感じております。武士の義理より人の情けをとる。それも一つのお立場かと。

黒兵衛　これは意外だ。今日はずいぶんとものわかりがいいな貞四郎。花火の夜はあれほど悔しさを口にしていたのに。

貞四郎　あの時は花火の見事な散り様にあおられました。それに……。

黒兵衛　なんだ貞四郎。

貞四郎　実は、女ができたのです。この半月そのことで悩んでおりました。仇

討ちの心が鈍り、生きていたいと心から思った。だから大石殿のお話に正直、ホッと安心しました。

内蔵助　安心していいぞ。好きな女と生きたいだけ生きろ。

貞四郎　はい。

黒兵衛　だが、そうなるとちょっとやっかいだ。

内蔵助　なにがだよ黒兵衛。

黒兵衛　おまえも聞いているだろう、例の魚屋のおかげで一度はしぼんだ浪士たちの気持ちに火がつきかけている。お前抜きでもと仇討ちに走るかもしれん。

内蔵助　それなら問題ないよ、魚屋が偽者とわかれば騒ぎも治まる。

貞四郎　しかし血判状は私の不注意で魚屋が。

内蔵助　顔見知りなんだ。俺の正体を明かすのをはばかっていままで黙ってきたが、こうなったら打ち明けるよ。気のいい男だ。一杯おごればあっさり返すさ。

黒兵衛　それで一件落着か。

内蔵助　ああ落着だ。

黒兵衛　死んだ殿が怒らんかな、俺たちが仇討ちしないと聞いたら。

貞四郎　風さそふ花よりもなお我はまた
3　人　春の名残りをいかにとかせん

音楽。

貞四郎　生き続けたいという、正直な辞世を残された殿です。我らの気持ちもおわかりくださるでしょう。
黒兵衛　うむ。
内蔵助　なんか、しんみりしちゃったね。
貞四郎　すみません。
内蔵助　いやいいのいいの、武士捨てちゃうってことだからさ、やっぱちょっと寂しいよ。

音楽。内蔵助、さきほど花吉が置いていった菓子鉢から塩豆をボリッと食う。

内蔵助　あ、この塩豆うまいぞ。ほら食ってみろ。

貞四郎　（ボリッ）ほんとだ、塩加減が絶妙だ。
内蔵助　それだけじゃないよ。しょっぱさの中にもほのかな甘みがある。
貞四郎　あ、これもしかして赤穂の塩。
内蔵助　え？

３人、確かめようとボリボリ食う。

黒兵衛　まちがいない、赤穂の塩だ。
内蔵助　懐かしいな。
貞四郎　江戸でお目にかかれるとは思いませんでした。
内蔵助　いい藩だったよ。平和でみんなのんびりしていて。
黒兵衛　真っ青な海を臨んで真っ白な塩田が広がっている。
貞四郎　塩のおかげで豊かでした。殿も民衆を大切にしたし。
内蔵助　人柄が上等だったんだ。世間知らずで少し激情家のところはあったけど、根は優しい人だったよ。
黒兵衛　その殿を俺たちは裏切るんだな。
内蔵助　やっぱりそう思うかお前。

黒兵衛　いや、お前の決断を責めているのではない。だが義理を捨て正直に生きるとは、かえって苦しみ続けることでもあると思ったのだ。貞四郎。

貞四郎　はい。

黒兵衛　殿の墓のある泉岳寺はどっちになる。

貞四郎　高輪はあちらかと。（オペ室花道方向を指す）

黒兵衛、オペ室花道に向かってゆっくり土下座をする。貞四郎、刀を置いてそれに従う。

音楽ＵＰ。内蔵助、複雑な思いで塩豆を食う。ボリボリと食いつづける。

暗転。オペ室花道口から声。

スカピン　おーい、八つぁーん、待ってくれよー。

八とスカピン、オペ室花道より登場。

八　なんだようるせえな、堀部安兵衛の話も大高源五の話もしてやったろ。

スカピン　それは聞いたけどよよ、八つぁんの話、瓦版に書いてあるのと同じじゃねえかまだ隠された事実とかあんだろ。ケチケチしねえで教えてくれよ。

八　馬鹿かてめえは。赤穂浪士が隠された事実をペラペラ喋るわけねえんだって、言えねえことになってんだよそういうのは。じゃあな、ちょっと川向こうに用事があるから。

スカピン　八つぁん、変わった。最近、主語も違うもん。

八　何いってんだよ変わってないよ拙者。

スカピン　ほら見ろそのわざとらしい笑顔。必要以上に大衆性を強調するスター特有のものだ。質問いいスか。

八　どうぞ。

スカピン　今朝のお食事は。

八　皆さんと同じ目刺しですよ。

スカピン　うそだろ！　八つぁんも目刺し食うんだって。

八　そのあとは皆さんと同じくセッチンへ。

スカピン　ほんとかよ！　八つぁんもウンコすんだって。

八　じゃ今後も応援よろしく。ファンあっての僕だ・か・ら。チャオ。

スカピン　やっぱり変わったよ八つぁん。

八　変わったのはそっちだスカピン。てめえがぎこちねえから俺もそんなふうになっちまうんだろ。

スカピン　わかってんだよそれは。だけどおめえが赤穂浪士だと思うとどうしても偉い人に見えてギクシャクしちゃうんだよ！

八　へえ、意外なもんだな。てめえみたいなやくざもんが赤穂浪士をそんなにあがめたてまつるとはよ。

スカピン　やくざだからそうなんじゃねえか。忠義を立てたくても俺たち浪人には立てる人がいねえ。サムライとして生まれたくせに、このままゴミみてえに死んでいくかと思うとたまらねえ気持ちになる。そうだ、八つぁん、俺を赤穂浪士に入れてくれねえか。浅野の殿さんとは縁もゆかりもねえが、誰でもいい、俺は誰かのために死にてえんだ。頼むよ、大石さんに言って一緒に討ち入りさせてくれ。この通りだ。

八　やめろスカピン、マジなてめえなんて気持ち悪いからよ。

スカピン　マジなんだよ俺、不良に見える奴ほどマジなもんだぜ世間は。

八　いや、いまさらこういうこと言うのもなんだけどさ、実は俺、ほんとのこと言っちゃうと、

奥花道にお直とおはんとおかね。

お　直　赤穂浪士の八つぁーん。

八　ハーイ。

お　直　おかねさんとお姉ちゃんが見たいって。あれやってー。

八　貴様が吉良か、殿のカタキ、シュッ、バサッ、シャキーン。

お直・おかね・おはん　かっこいいー。

お直、おかね、おはん奥花道へ退場。

八　言うだけは言ってみよう大石殿に。

スカピン　ほんとけっ。

八　武士に二言はない。

スカピン　恩に着るぜ、八つぁん。

スカピン、オペ室花道より退場。ドンブラコと川の音。

八　ケッ、恐ろしいね全く自分が。一つウソついたら坂を転げ落ちるようにウソをつき続けなきゃなんねえ。このまま行くととんでもねえことになるぞ、わかっちゃいるんだ、だけど酒も女も向こうから寄って来る、わかっちゃいるけどやめられねえんだ赤穂浪士。よし、今日は河岸変えて深川だ。深川に赤穂浪士登場。これで決まりだな明日の瓦版。

奥花道より舞台中央へ、舟が登場。笠をかぶったすずが乗っている。

八　お、渡りに船だ。おーい深川だ、相乗りいいかい。

すず　どうぞ。

八　こいつは幸先いいや、出会い頭に粋な姉さんと相乗りとはよ、（と乗り込む）お、あんたはいつかの南京玉すだれ。

すず　お久しぶり。聞いていますよあなたが赤穂浪士だったと。

八　へへ、どうもこまっちまってんだ有名になりすぎちまってよ。こっちは身を潜めて吉良の動きを探ってるっていうのになあ。

すず　ご苦労お察しいたします。

八　あ、手相見ようか。いやほら、なんか俺たち奇遇ってえの？　ひょっとして運命の交わりとかあるんじゃねえかと思ってよ。

すず　お願いします。

八　ああ、あんあんあん。

すず　いかがですか運命の交わりは。

八　十八？

すず　十六です。

八　なるほどね、やっぱりきれいだよ肌。男性経験は？

すず　ありません。

八　ああそうなんだ、ハハ、船頭さん、深川やめてそのへんの船宿つけて。いやほら、先の短い命だから俺。君との思い出を味わいながら死んでいきたいと思ってさ。いいよね。

すず　もちろんです、お伴しましょう、地獄まで。

と、すず、膝に置いていた巾着袋を八の腹に突きつける。音楽。

八　あ、何これ、とがった感触。

すず　合口です。女だと思って見くびらないでください。鍛えた腕は畳三枚をズブリと刺し通せます。

八　じょーだん。

すず　私は大内内蔵助の娘。あなたが浪士の名を騙ったことに大変腹を立てています。ここで一思いに始末したいところですが、事情があってもうしばらくは私の役に立ってもらわなくてはいけません。働いてくれますか私のために。

八　やります、なんでもやっちゃいます、目ン玉ひっくり返せと言われればひっくり返すぞコン畜生。

二階に奥花道側に向って走るスカピン、つづいて長太、一八。

スカピン　おーい八つぁん、元禄堂を連れてきたぜ。
すずちょうどいい。私の言う通りに。
八はいっ。
長太質問するから答えてくださーい、この人が浪士になったというのは本当ですか。
すず本当だ、ほかにも志願者が続々と集まっている。
八本当だ、ほかにも志願者が続々だー。
一八あたしも仲間になっていいでげすかー。
すず大歓迎だ。赤穂浪士は楽しい仲間を集っている。
八大歓迎だ。楽しい仲間を仲間を集ってるぞ。
すず金、女、名誉、
八金、女、名誉、
すずすべてが君のものになる。
八すべてが君のもの。
一八バンザーイ。
長太ところで今日はどういうご用件ですかー。
すず浪士の集会だ。

八　浪士の集会。
すず　いよいよ討ち入りの決行が本決まりになったのだ。
八　いよいよ討ち入り決行――

三味線ＣＵＴ。船が奥花道へ動く。

長太　いよいよ討ち入り決行「か!?」はないんですね。
すず　ないぞ、全員あっぱれ散ってみせよう。
八　畜生、あっぱれ散るぞー。
長太　特ダネだ！
すず　吉良覚悟。
八　吉良覚悟。
すず・八　お前のかーちゃんデーベーソ。
長太　と赤穂浪士は、吉良への憎しみを語った。ありがと八つぁん、これ取材料！

長太、金をほうるマイム。チャリンと舟の床に金が落ちた音。

スカピン　明日から俺たちも参加するぞー。
一　八　よろしく八つぁーん。
八　おーい、待ってくれー。
すず　この金であなたの刀を買いましょう。
八　どうする気だ南京。
すず　決まってるでしょ、討ち入りの稽古。
八　うっそー。

船、奥花道より退場。
音楽。オペ室花道からお熊と藤吉、５人の若い衆、喜多川の名を呼びながら走り込んでくる。

お熊　花魁逃がしたとあっちゃ、遊女屋の恥だよ。きっと見つけるんだよ。お前たち。
藤吉　二手に分かれよう。
若い衆　おうっ。

藤吉、一吉、六吉、客席花道、お熊、二吉、三吉、五吉、オペ室花道より退場。
奥花道より喜多川、少し遅れて貞四郎登場。

喜多川　貞さん。
貞四郎　喜多川。

二人、中央で抱き合う。

喜多川　ごめんね、いやな旦那から身請け話が出たばっかりに、あんたにまで危ない思いさせちゃって。
貞四郎　いいんだ喜多川、どんなに危ない橋を渡ろうとその先に俺の者になるお前がいれば。
喜多川　うれしい貞さん。
貞四郎　俺だって。

再び、抱き合う。喜多川を呼ぶ声。二人離れる。客席花道、
オペ室花道から、お熊、若い衆たち登場。

三　吉　どこだー。
五　吉　でてこーい。
一　吉　あっちはいねえ。
三　吉　こっちもいねえ。
お　熊　用水桶は探したかい。
若い衆　まだだ。
お　熊　探すんだよっ。
若い衆　おうっ。

皆、客席花道とオペ室花道に分かれて退場。

喜多川　桶の中まで探される。もう逃げる場所がない。
貞四郎　（歌）なぜ出会った　その瞳　罪　罪　罪
喜多川　（歌）見つめ合って　おちてゆく　恋　恋

貞四郎　馬鹿なことやってる場合じゃないよ。逃げなきゃ。
喜多川　うん。

二人、逃げようとして転ぶ。

喜多川　でもほんとうにうれしいわ、あなたと暮らす日を夢に見てたもの。
貞四郎　俺だってさ、志を捨てたいま、残ってる夢はもうお前しかないんだ。
喜多川　何度ねだってもあなたはそのお志を口にしなかった。そんなに大事なものをどうして捨てたの。
貞四郎　苦しんだ末、決めたからだ。皆の幸せを願う、優しい心の持ち主と、一番正直に生きようと決めたからだ。
喜多川　ほんとうにいいのね、正直に生きるのは辛いわよ。嘘や建て前で生きたほうがよっぽど楽。本当にあたしと最後まで正直を貫き通してくれるわね。
貞四郎　ああ、必ず貫く。

二人、抱き合う。三味蔵の三味線が聞こえてくる。

喜多川　じゃあ羅生門河岸へ行きましょう。

貞四郎　羅生門河岸？

喜多川　お地蔵様の前の塀が人一人分だけ抜けるのよ。板を渡してお歯黒ドブを飛び越せば吉原田圃。そこからはもう自由の身だわ。

貞四郎　はじめから知っていたのか。

喜多川　いつか本当に好きな人ができたらそうしようと思っていた。だけど最初で最後のあたしの賭なの。ごめんね試して。必死なのよ。

貞四郎　俺も必死だ。俺にも賭だ。

音楽ＵＰ。二人、オペ室花道へ。

貞四郎　喜多川、阿呆だな俺たちは。

喜多川　阿呆のどこが悪いのよ。

二人、オペ室花道口から退場。

奥花道より三味蔵登場。

唸り屋三味蔵、貞四郎駆け落ちの一席

三味蔵　〜花の吉原　郭抜け
駆け落ちしたるその先は
町の片隅　船宿の
二階にひっそり身を寄せる
あわれ　喜多川　貞四郎
表に聞こえるあの声は
瓦版屋の　叫ぶ声

「赤穂浪士の討ち入りだ。赤穂浪士の討ち入りだ」

〜喜多川　抱く手　ふと止めて
遠くを見つめる貞四郎
あ〜この俺は　今　何を
それを察した喜多川が

「いいの私の事なんかかまわず行ってちょうだい」
「いやもう俺は、俺はこの世を捨てたんだ」

〜男と女の顛末は
　若き二人の行く末は
　　いかなる事になるのやら

もう一度やったら止められない止まらないニセ赤穂浪士
もはや逃げるに逃げられぬウソにはまった魚屋八つぁんの運命は
なんと自らの立場を捨てても討ち入りを止めようとする赤穂浪士、正直を貫こうとする大石内蔵助の運命は

〜いかなる事になるのやら

かくして第一幕

〜ちょうど時間になりました
ちょっと一息願いまして
おあと二幕で　また　口演

第一幕終了。

第二幕

唸り屋三味蔵、休憩中かわら版の宣伝をしていた長太と話しながら、奥花道より登場。

唸り屋三味蔵、第二幕がはじまるぞの一席

三味蔵　お、なんだ！　こんな所に八つぁんが笑いながら寝ている。それでは、八つぁんワルツ。

〽八つぁん　八つぁん　八つぁん　八つぁん

歌ってる場合ではございません。

第二幕の開演！

〽時間来るまでごゆっくり

はい！

拍子木。

三味蔵奥花道より退場。

大の字で寝ている八。「うわーっ」という八の悲鳴。手元に刀。

八

あ、夢か。畜生、きのうの晩からちっとも眠れねえ。ウトウトすると吉良の侍に斬られる夢ばかり見やがる。ああ、なんでこんなことになっちまったんだろ。棒手振りの魚屋がほんとに討ち入りだなんてよ。あの南京娘だけならまだしもおっかねえ顔したお侍が出てきやがったからなあ。元を正せば大石って野郎がいけないんだよ。野郎が情けねえから俺がこんな目にあっちまうんだ。畜生め、とっつかまえてひっぱたいてやりてえぜまったく。

「八つぁーん」と呼ぶスカピン、一八、奥花道より登場。

舞台全体に明かり入ると長屋の晩秋、夕暮れである。

八　なんだうるせえぞ。

スカピン　討ち入りの稽古いかねえのかよ。

一　八　みんな八幡様に集まってるでげすよー。

八　ガラガラッ、てめえらなんでそんなに明るいんだ、コン畜生。ほんとに討ち入りなんかしたらよくて切腹、へたすりゃ縛り首なんだぜ、ちったあ考えねぇのかそういうことを。

一　八　そんなことないでしょう、仕官の道が開けるって言ってたでげすよ、あの玉すだれがー。

スカピン　おいどうしたんだよ八つぁん、弱気なこと言いやがってよ。俺たちはあんたについていくんだぜ。あの大石の娘っていう玉すだれに聞いたんだ、内蔵助は事情があっていまは姿を見せないが必ず後で合流する、それまでは赤穂でも武勇で鳴らした八つぁんが大将だって。

八　そんなデタラメ言いやがったか玉すだれ……！

スカピン　とんでもなく強えんだってな八つぁん、堀部安兵衛と手合わせをして勝ったっていうじゃねえか。

一　八　天狗に育てられたって聞いたでげすよー。
八　そんなわけねえじゃねえか、ぜんぶデタラメだー。
スカピン　照れるなって。
八　照れてねえよっ。
一　八　行きましょう八つぁん。
八　行かねえんだ俺は。
スカピン　どうしてだよわけを聞かせろ。
八　うるせえ、行かねえったら行かねえんだよっ。

奥花道から長太登場。

長　太　よっ、いたいた、元禄堂でございます。お稽古のほうをちょっくら取材させていただきたいとおもいましてな、おかげさまで瓦版の売上げもうなぎ登りお礼はたんまり弾むでげすよ、よっ、赤穂浪士、日本一の巨大アゴ、三日月、よっ、よっ、よっ。
一　八　うまいねあたしより。
スカピン　そりゃいいんだが元禄堂。

長太　へいっ。

スカピン　八つぁんが行かねえって言ってんだ。手慣れたおめえからわけを聞いてくんな。

長太　（窓に近づいて）どうしたんスか、八つぁん。なんか面白くねえことでもあったんスか？　ああ、急にお仲間が増えたから、手柄横取りされるんじゃねえかって心配してるんでしょ、それなら心配いりませんよ、何しろあんたが一番の花形だから、ほかに誰がいたってあんたの名前を一番大きく扱うんだ。赤穂浪士はあんたでもってんですからね、それともあれですか、みんなで稽古なんかやると吉良方に筒抜けだって心配してんスか？　それも大丈夫だ、この元禄堂ちゃんと心得ていましてね、稽古の場所はとんでもねえガセを書いた。あたしら皆さんの味方ですからね、邪魔するようなことは決してしませんや。なんですか黙っちゃって、あたし助けると思ってね、無口な獅子の口をちったあきいてくださいな。

八　やめたんだよ。

長太　はい？

八　やらねえんだよ討ち入りは。

長太　誰が決めたんです？

八　俺。

長太　いつ？

八　いま。

スカピン　おい嘘だろ八つぁん、タチの悪い冗談だろ。

八　ほんとだよっ。

長太　さー、大変だ、号外だ、赤穂浪士が討ち入りをやめたよ、八つぁんが言うんだから間違いねえ、花の赤穂浪士、討ち入り中止だー、と行きたいところだがね八つぁん、それでいいのかよあんた！

八　いいんだよ、吉良に殺されるよりはマシでえ。

長太　そりゃ吉良には殺されなくてもね、お江戸に殺されるよあんた！　この浮かれたようでも息苦しい、胸の上にたくあん石のっけて昼寝してるような世の中で、あんたたちはスカッとさせてくれそうなただ一つの夢なんだ。それを裏切ったら八つぁん、あんた寄ってたかって八つ裂きにされるよ。

八　畜生、どっちにしても死ぬのか俺は……！

オペ室花道から幸登場。

幸　ガラガラッ、おや、行かなくていいのかい。八幡様に集まってたよ、お仲間。

八　ふん、なんでそんなとこ行った。

幸　お百度だよ。おまえさんが志を遂げられるようにさ。

八　よけいなことすんじゃねえや！（思いきりひっぱたく）

幸　だってあたしは武士の女房だろ。

八　……思いあがんじゃねえよっ（いきおいで外へ出る）。何ぼんやりしてんだよっ、行くぜ。

一八　それでこそ八つぁん！

長太　急ぎましょう、今日は旗本の行列が通るって聞きました。むこうぐるっと回ってひっかかんねえようにしねえと。

スカピン　よしっ、道案内してくんな。

八、長太、スカピン、一八、奥花道より退場。

オペ室花道から風車売り姿の内蔵助登場。

内蔵助　ごめんなさいよ、ガラガラッ、八つぁんは？
幸　今みんなと行ったよ、討ち入りの稽古。
内蔵助　ああ……出直してくらぁ。
幸　うわぁーん。（と、おもむろに泣く）
内蔵助　どうしたんだよお幸さん。
幸　あの人は、あの人は、死んじまうんだよ、でも仕方ないんだ、あたしは我慢しなきゃならないの、でもいいだろ、一人のときぐらい思いっ切り泣いても。
内蔵助　ああ、そりゃいいさ。
幸　あんたみたいな人と一緒になればよかったよ、いっくらぼんくらな風車売りだって、いきなり討ち入りして死ぬなんてことはないじゃないか。
内蔵助　うん……
幸　あの人は乱暴で向こう見ずだけどあたしはそこに惚れたんだ。惚れたところに最後まであたしは泣かされるのさ。
内蔵助　そうだなあ。

幸　弥助さん、ちょっと留守番たのんでいい？

内蔵助　いいよ。

幸　卵買ってくるよ。あの人が生きてるうちにヘソクリ使っちまわなきゃ。

幸、走ってオペ室花道へ退場。内蔵助、見送り、複雑な心境。

オペ室花道から黒兵衛登場。

黒兵衛　八つぁん、八つぁんはご在宅か。そなたが来ないことには稽古がはじまらぬのだ。すず殿もいらついておる。この黒兵衛の顔を立てると思って至急ご同行願いたい。入るぞ、ガラガラッ（内蔵助を見つけ）あっ、（逃げようとする）

内蔵助　逃げるな黒兵衛。入れ。

黒兵衛、入る。

内蔵助　閉めろ。

黒兵衛　ガラガラッ。
内蔵助　あがれ。

黒兵衛、内蔵助から少し離れたところに座る。

内蔵助　どういうことだ、お前は俺に約束したはずだぞ、すずを説得して討ち入りをやめさせると。
黒兵衛　すまん、説得しきれなかった。
内蔵助　じゃあ俺にそう言えばいいじゃない。それがなんだよ、八つぁんかつぎだして討ち入りの稽古なんかしちゃってさ、お前言ってることとやってることがめちゃめちゃだぞ。俺がちょっと目離すとすずの言いなりになっちゃってさ、どういうつもりだよ、うちの娘に惚れてんのか。
黒兵衛　ごめん、惚れちゃった。
内蔵助　えーっ。マジ？
黒兵衛　マジ。
内蔵助　いつからだよ。

黒兵衛　赤穂の城下でばったりお会いしたときからだ。ひさびさにお会いしてなんと美しくなられたかと思った。そのお美しいお顔とおむつを替えた時のことが妙になまめかしくまじりあって、なんというかその、惚れてしまった。

内蔵助　それですずにくっついてノコノコ江戸まで出てきたのか。

黒兵衛　そうだ、面目無い。

内蔵助　やっぱりなあ、おかしいと思ってたんだよ。お前なんか一番の和平開城派でさ、みんなに裏切り者呼ばわりされてたじゃない。それがいきなりすずと一緒に討ち入り急進派になっちゃってて納得できなかったんだよ俺。

黒兵衛　赤穂からの旅は楽しかった。時に旅篭が満室のことがあってな、そういう時はすず殿と布団を並べて寝るなりゆきとなり……。

内蔵助　おい、おまえまさかへんなことしなかったろうな。

黒兵衛　した。

内蔵助　なんだとっ。

黒兵衛　いやいや最後までは及んでおらん。寝息をたてたところを見計らってゴロゴロッとすず殿の布団に侵入したところ腹に合口を突きつけられ

てな、さすがは武士の娘。

内蔵助　感心すんな馬鹿野郎。

黒兵衛　ほかにも風呂場を覗いた時には桶をぶつけられ、わらじを直す隙をみて抱きつこうとした時は思いっきり膝蹴りを食らった。

内蔵助　デバガメかお前は。

黒兵衛　だがそうい気の強いところがあの娘の魅力だ。お前に腹を立てキーキーと討ち入り唱える横顔などは実にどうも、たまらん。

内蔵助　殴らせろ黒兵衛。

黒兵衛　なに。

内蔵助　今の話を聞いて父親として黙ってるわけにはいかん。殴らせろ。

黒兵衛　よし。

黒兵衛、内蔵助、向き合う。

内蔵助　布団のぶん（ピシャ）風呂場のぶん（ピシャ）わらじのぶん（ピシャ）これで許してやる。水に流そう。

黒兵衛　３つしか言わないでよかった。

内蔵助　それでどうするつもりだよお前。すずに惚れた勢いで最後まで突っ走る気か。

黒兵衛　俺にもわからん。すず殿の笑顔が見たくて俺は手伝う。その先に赤穂の平和があれば俺は刀を捨て漁師をやるし、切腹があれば俺は腹を切る。

内蔵助　とんでもねえ阿呆だお前は。

黒兵衛　ああ、阿呆浪士だ。

奥花道からそれぞれ桶をもってお直とおはん登場。

お　直　でさ、おねえちゃん。

おはん　なに。

お　直　その後、どうなのよ弥助さんとは。

おはん　大人の関係。

お　直　ウソやったじゃん、出戻り出直しじゃん。

おはん　まあね、ハッハハー。

お　直　でもさでもさでもさ、

おはん　何でも聞いて、ちょーらいっ。
お　直　あの真面目そうな弥助さんがどうやって迫ったわけ？
おはん　それがいきなり襲ってきたのよ、ゆうべ。
お　直　ゆうべ。
おはん　あんたがお湯いってる間、ありゃ酔った勢いだったね、たいてい男は
　　そうだけどね。
お　直　なんて言って迫ってきたの？
おはん　塩豆、塩豆って。
お　直　塩豆？
おはん　恋は男を狂わせるよ、ハッハッハー。
お　直　それから。
おはん　仕方ないんだ、仕方ないんだ。
お　直　なんでも2度言うんだねえ。
おはん　恋はリフレイン、ハッハッハー。
お　直　あとは。
おはん　俺は侍じゃない、俺は侍じゃない。
お　直　そりゃそうだよ、風車屋だもん。

おはん　つまり言い訳だね、侍じゃないから無礼を許せという。
お　直　無礼どころか婚礼だろ。元を正せばドブが結んだご縁だね。
おはん　そうよ、出戻りがドブから奇跡の出直しだわ。
お　直　よっ、ドブから蘇った女。
おはん　お直、持ったげる、幸せがみなぎると力もみなぎるの。
お　直　子供は何人ぐらい欲しいですか。
おはん　１００人！

おはん、お直、奥花道より退場。

黒兵衛　大石。
内蔵助　なんだよ。
黒兵衛　１００人もつくったら大変だぞ。
内蔵助　馬鹿野郎っ……最低の男だよ俺は。ヤケ酒を飲んだ勢いでたいして好きでもない女に手をつけてしまった……
黒兵衛　やればいいじゃないか討ち入りを。お前はみんなのことを思ってやらぬと決断をしたが、心の底ではやらぬわけにいかぬと思っているの

だ。だからヤケ酒を飲みお前らしからぬことをする。正直に言え大石、侍の心をなくしたなどとは方便で、お前の心の奥には侍の火がくすぶり続けているのだと。

内蔵助　……

黒兵衛、立ち上がり草履を履き戸に手をかけ、

黒兵衛　おかしな世の中だな、侍よりも阿呆が刀を抜く。

黒兵衛、オペ室花道へ退場。内蔵助、頭を抱え込む。奥花道より八、走って登場。

八　ガラガラッ、お、弥助、なんでてめえが俺んちにいるんでえ。

内蔵助　いや、ちょっと幸さんに留守番たのまれてさ、

八　そうか、まあいいや、俺は押し入れに隠れるから、てめえちょっくらシラきってくんな、ガラガラッ。（と押入れを開ける）

内蔵助　だけどなんでさ。

八　いいじゃねえか、わけはあとで話すからよ。

奥花道からスカピン、一八、長太登場。「八つぁーん」と口々に呼んで八の家のほうへ。

八　ほら来た、頼んだぜ、ガラガラッ。（と押し入れを閉めてしまう）

内蔵助　ちょっと八つぁん、

スカピン　ガラガラッ、おう風車屋、八つぁんはどうした。

内蔵助　（オペ室花道を指して）むこう行ったよ。俺は留守番頼まれてさ、

スカピン　そうかい、

一八　しかしどうしたんでしょうな、集まった討ち入り志願者を見たらいきなり走り出して。

スカピン　武者震いって奴だろう。剣の達人は剣の怖さを知るというからなあ。

長太　こっち行ったら行列とぶつかっちまいますぜ。

スカピン　しょうがないじゃねえか、急げ。ありがとよ風車。

一八　ピシャッ。

スカピン、長太、一八、オペ室花道へ退場。

八　いったかい。

内蔵助　いったよ。

八　ああ助かった。ガラガラッ、すまねえが弥助、そこに急須があるから茶いれてくんな。

内蔵助　ああ、（マイムで急須にさわって）冷えてるよ。

八　ああかまわねえ、水でもなんでもいいんだ。

内蔵助、茶を注ぎ八に、

八　お、ありがとよ。（ゴクゴクと飲み）ああ、生き返った。

内蔵助　逃げてきたのか、討ち入りの稽古。

八　おう、あんな馬鹿なことできやしねえよ。八幡様行って驚いた。赤穂の浪人以外にも、スカピンみてえな縁もゆかりもねえ貧乏浪人がウジムシみてえに集まってきてよ、あいつらやっぱり侍なんだな、刀が振れると思ったら目ギラギラさせてやがる。正直なおめえにだけは白状

しとくけどよ、俺は正真正銘、魚屋の八なんだ。調子に乗ってるうちに赤穂浪士ってことになっちまったが、生まれついての棒手振りよ。マグロ切るならお手のものだが、人斬るなんて恐くて出来ねえ。そう思ったら思わず足が駆け出しちまったんだ。畜生、どうしたもんかな、いい加減ただの八つぁんに戻りてえよ。

内蔵助　じゃあ、血判状を返せ。

八　ああ、早く返してえよこんなもの、だけど受けとらねえんだあのすずって娘が。

内蔵助　俺に返せばいい、そうしたらもう問題はない。お前はただの魚屋ということになって集まった浪人の熱も冷める。

八　なにわけわかんねえこといいやがんだ弥助。なんだってそんな偉そうなこというんだよ風車売りが。

内蔵助　大石だ俺は。大石内蔵助だ。

八　冗談じゃねえや軽石みてえな顔しやがって。てめえが大石内蔵助なら、俺は浅野タクミノカミサマだよ。

内蔵助　（懐から分厚い紙束を取り出しドサッと置いて）浪士たちの血判状だ。お前が魚屋の八であるように、俺は正真正銘、大石内蔵助だ。い

や、騙していて悪かった。ごめん。

八　じゃあ、どうして討ち入りしねえんだよ。あ。てめえ死ぬのが怖くて俺に押しつけようってんだな。

内蔵助　いやそんなつもりは決してない。皆を説得してやめさせるつもりだ。今日集まった連中も一度はこれを俺に返したんだ。それなのに調子に乗ってまたことを起こそうとしている。そんな馬鹿な真似はさせたくないのだ俺は。

八　驚いたね、どうも。大石内蔵助が討ち入りをやめさせようってんだからな。それでおめえ、もう侍はやめる気か。

内蔵助　ああ、もう武士の魂に自信が持てない。町人になって余生をおとなしく暮らすよ。だから血判状を返してくれ。それをもって調子に乗った連中を説得する。

八　ああ、こんな疫病神みてえなもんはもういらねえや。（返そうとして）待てよ。

内蔵助　なんだ。

八　このへんに妙にひっかかる気持ちがあるんだ。武士の魂がねえから討ち入りはしねえっていうおめえの話に納得できねえ。

内蔵助　なぜだ、それは。

オペ室花道から長太登場。

長　太　たいへんだー、旗本の行列を横切って町人が斬られたぞー。たいこもちの一八がお侍に斬られたぞー。

八　一八がっ（戸を開け）ほんとか元禄堂。

長　太　ああ、背中をけさがけに斬られた。スカピンが赤ひげ先生のところへ連れていった。

八　死ぬのか一八は。命はどうなんだ。

長　太　わからねえ、だけど血がいっぱい出たからよ、びっくりしたぜ、あいつ人間ばなれした顔してんだろ。

八　おう。

長　太　やっぱり人間じゃなかったんだ、血が緑でよ。

八　ほんとか。

長　太　うそだよあんたの気を軽くしようと思ってよ。

八　バカヤロッ。（思いっきり殴る）

長　太　一八……！（とオペ室花道より退場）

八　そうだ、気になってたのはこのことだ！

音楽。

八　内蔵助さんよ、俺たち町人はいつもビクビク暮らしてんだ。町でお侍と会ったら、目を合わせねえように顔をそらす。呼び止められても魚売るときも、金がたりねえって言われりゃ、言い値で置いてくるしかねえ。おかしな話さ、だけどそのおかしな話がまかりとおっちまうんだ。斬られねえようにするには認めちまうよりほかねえんだよ。だから俺たちはお侍を尊敬するようにした。いまの世の中役には立たなくても、きっといつか俺たちの命を守ってくれるえれえ人たちだと思い込もうとしてきたんだよっ。それがなんでえ、武士の心がなくなったから仇討ちはやめるだと。冗談じゃねえや、勝手が過ぎるってもんだぜ。仇討ちでも何でもして桜の花みてえにパッと散ってよ、俺たちよりずーっと偉えってとこ見せてくんなきゃ、我慢してる俺たちはどうなんだよっ。（内蔵助の胸倉をつかみ）答えろてめえ、答えろ内蔵助

っ。てめえがやんねえなら俺がやる。赤穂浪士を最後まで通してお江戸にパッと散ってやるよ屁でもひってろ大石、てめえより俺が侍だー！

音楽ＵＰ。八、オペ室花道より走って退場。

二階にスカピン、すず、黒兵衛、ゾロリと並んだ浪人たち。

スカピンは一八の似顔絵の入った額をもっている。

スカピン　一八が死んだ。背中の傷は軽傷だったが倒れるときに往来にあごをしたたかに打ちつけ鼻が陥没。一八の死を無駄にはできねえ。討ち入る理由は定かじゃねえが、討ち入る気持ちは燃えてきた。そうだろてめえら。

皆　おうっ。

すず　父上、風車のように、風にふかれるまま生きたければご勝手に。あなたがいなくても、もう討ち入りはできます。

三味蔵、オペ室花道に登場。

三味蔵　浪曲合唱！

唸り屋三味蔵、浪曲合唱

〜大石殿は必要なし
我々だけで
あああん（三味蔵）
あああん（全員）
あああん（三味蔵）
あああん（全員）
討ち入ります

三味蔵の三味線に合わせて歌い踊りながら、スカピン、すず、黒兵衛、浪人たちが二階から舞台に降りてくる。
内蔵助の周りを回って奥花道より退場。
最後方に一人もついて踊りながら、内蔵助の周りを何度も回

る。暗転。

客席花道に野菜を売るおかね。

おかね　大根はいらんかねー、里芋はいらんかねー、まるまる太ったかぼちゃはいらんかねー、ああ、今日はこんぐれえにしとくか、つかれたなあ。

すっかり長屋のおかみらしくなった喜多川、その本名はお道という。

お　道　かーちゃん、お帰り。今日もお疲れだったなあ。

おかね　ああ、もう足がゴンボのようさ。婿さんはまだけ。

お　道　まだみたい、今日は川向こうまで行ってみるっていってたから遅くなるかもしんねえ。

おかね　どこまで行ってもまだあの男には売れねえっぺさ、仏頂面じゃカボチャは売れねえ、カボチャの気持ちになってほっくり笑顔でいかねえと

よ。

オペ室花道に野菜売り姿の貞四郎登場。

貞四郎　あー、カボチャはいかがかな、ほっくりうまいぞ、こら買わぬか町人、きょうのお夕飯はカボチャにしなさい。なんだと、私がここまでいうのに買わぬというのか。そういう了見なら、斬る。

おかね　こらバカ婿、おめえは野菜売りだ、もうお侍じゃねえんだからよ。ほっくりとした笑顔だよっ。

貞四郎　ほっくりとした笑顔、こうか。……こら町人、なぜ逃げる。

おかね　ああもういいから、こっちゃこい、説教してやっから。

貞四郎、舞台へ。

おかね　そこさ座って、ほっかぶり取るんだよ。

貞四郎、座り手拭いを取る。（鼠小僧のように頬被りをして

いたのである）

おかね　だいたいどういう了見だっぺそのほっかぶりはよ。

貞四郎　なんというかその、恥ずかしいのか。

おかね　カボチャ売るのがそんなに恥ずかしいか。

貞四郎　いえ、決してそんな。カボチャを売るのが恥ずかしいのではなく、大きな声を出して歩くという、その行為が恥ずかしいのでありまして。

おかね　おんなじとだっぺ。おめえは商人が卑しいもんだとおもってるに違いねえ。だから大きな声が出せねえのさ。ここで言ってごらんよカボチャと。

貞四郎　カボチャ。

おかね　魂が入ってねえ。もう一度だ。

貞四郎　カボチャ。

おかね　カボチャはもっとうめえもんだよ。うまくて腹がぽってり膨らむもんだ。その気持ちでもう一度。

貞四郎　カボチャー。

おかね　そうだ、それでいいんだ、やればできるじゃねえか。いいかバカ婿、

おめえは花魁と駆け落ちするなんて大馬鹿なことをしちまった男さ。もう後戻りはきかねえ、世間に一生名前のだせねえ人非人になっちまった男だよ。侍だったことはすっかり忘れて、誠心誠意カボチャを売れ。おめえがいくら大馬鹿でも、カボチャはしらねえ。売ってくれればにっこり売られていくのさカボチャさんは。わかったかバカ婿。

貞四郎　はい。

おかね　明日から泥棒みてえなほっかぶりすんじゃねえぞ。

貞四郎　はい、もうしません。

おかね　よし（立ち上がり、奥花道へ）あ、バカ婿、湯が沸いたら行水すっからまた背中流してくれっかおめえ。

貞四郎　はい、喜んで。

おかね　いくら馬鹿でも男ぶりはいいから、おめえ。さわってもらうと娘になったような心持ちだよ俺も、ヒヒヒ。

おかね、奥花道から退場。

お　道　ごめんね貞さん、かーちゃん勝手なことばかり言って。

貞四郎　いいんだよ、君の母上だから我慢する。それよりこの長屋は昔の知り合いがうろうろしている。顔をあわせるのが少々辛いんだ。

お　道　そう、それでしてたのねほっかぶり。

貞四郎　でも明日からやめるよ。母上のいう通りだ。俺はもう、恥を覚えるほど偉くはない。

お　道　後悔してない？　貞さん。

貞四郎　いや。

お　道　ウソ、後悔してるわよ、あんなに燃え上がって駆け落ちした先がこんな暮らしだもん。話にはよく聞くけど、駆け落ちの行く末なんてたいていこんなもの。おしろいやきれいな着物で隠していても、体の中には貧乏や苦しい暮らしが住んでいる。郭を出たらまたそこへ戻ることを知っているの。だから女郎は好きな人ができると心中したがるのよ。でもあたしは生きていたかった。どんな生活でも貞さんと生きていたかった。ごめんね。

貞四郎　謝ってくれるな、俺も同じだ、すべてを捨ててもお前と生きていたい。

二人、抱き合う。

おかね　おみちー、たらいに湯くんでけろー。

お　道　はーい。いつもあの声が邪魔をする。せつないものね長屋の恋は。

お道、奥花道へ。

貞四郎　お前を遊女屋に売った女だろ、どうしてまた一緒に暮らす。

お　道　理由はないわ、親だからよ。

お道、奥花道より退場。貞四郎、うなだれる。オペ室花道よりスカピン登場。

スカピン　ガラガラッ、ようお侍。

貞四郎　あ、お前は。

スカピン　うれしいね、覚えててくれたかい。そうだ、八つぁんと組んで仇討ちの狂言をやった。そしていまでは赤穂浪士だ。

貞四郎　あの夜を境にお互いの運命が変わったな。いまでは俺は世間をしのぶ身。

スカピン　聞いたよ、今日黒兵衛とおめえさんの姿をみかけてその話になった。黒兵衛は駆け落ちの噂を聞いてもしやと思い、遊女屋で逃げた客の人相を確かめおめえさんだと目星をつけていた。この長屋に住んでいたことも知っていたがバツが悪かろうと見て見ぬふりだ。

貞四郎　そうだったのか。

スカピン　おめえさん、ずいぶん仇を討ちたがってたそうじゃねえか。俺が行くと意地を張るにちがいねえと黒兵衛はこのやくざもんを使いに出した。どうだお侍、俺たちと討ち入りしねえか。

貞四郎　だめだよ、いまさらできない。

スカピン　大石の娘も歓迎と言っている。本物の赤穂浪士が多いにこしたことはねえからな。

貞四郎　いや、駆け落ち者の俺がいたら、皆に迷惑がかかる。

スカピン　何いってやがんだヒョウロク、人の迷惑なんかどうだっていいじゃねえか。この俺だって縁もねえのに討ち入りをやる。侍に生まれたからにはどうあれパッと散りてえからだ。生きてるうちに一度でも、これ

で死ねると思う熱い気持ちになりてえ。そういう気持ち、浪人暮しが長すぎて忘れかけてたそういう気持ち、八つぁんが火をつけて死んだ一八が油を注いだ。だからやる。やりたいからやる。おめえさんもそうしろ。俺たちの仲間になれ。

貞四郎　いいよ、俺はもうそういう気持ちになった、これで死ねる気持ちに、吉原を逃げるとき。

スカピン　だったら余計いいじゃねえか、その気持ちになったらあとは余生だ、それともおめえ、この貧乏長屋で一生グズグズ生きる気かよ。

おかね　（声）おーい、馬鹿ムコー。

スカピン　いいのかおめえあんなこと言われて。

おかね　（声）早く背中流してけろー。

スカピン　あのババアが死ぬまでおめえずーっと馬鹿ムコだぞ。

おかね　（声）はやくしねえとお湯がさめるっぺー。

スカピン　ババアが死ぬころには花魁もババアだ。おめえの余生はババアがすべてだ。

おかね　（声）馬鹿ムコはやくー。

貞四郎、おこったように立ち上がる。

スカピン　お、やっとわかったか。

貞四郎　はーい、いまいきまーす。（奥花道へ）

スカピン　なぜだお侍、なぜお前はそこまで。

貞四郎　あの吉原の思い出があれば、ババアがいても生きていける。（退場）

スカピン　馬鹿ムコー。（オ〜ヘ室花道へ退場）

スカピンの去ったあと、それを追うように舞台に戻る貞四郎。
が、諦めたように奥花道より退場。
客席花道より三味蔵登場。

喰り屋三味蔵、地獄河岸の一席

三味蔵　〜女に溺れる男もいれば
酒に溺れるやつもいる
やぶれかぶれの内蔵助

酒で心をごまかして
ふらりふらりと千鳥足
やってきました地獄河岸
安いお金で体売る
哀れ女郎のなれの果て
それを眺めて内蔵助

「あ〜あ
俺の心と同じだ」

〜ころがりこんだる吹きだまり

貞四郎とすれ違うように奥花道から内蔵助登場。
三味蔵客席花道へ退場。
吉原の明かり。吉原でも最低級羅生門河岸である。
内蔵助は立ちつくす。
オペ室花道からむしろを抱え頭巾をかぶったお熊登場。内蔵

助の腕をサッとつかんで。

お　熊　お前たち、邪魔するんじゃないよ、このお客はあたしが貰ったからね。

お熊、内蔵助を引っ張ってサッサとムシロを敷く。

内蔵助　いや俺はそういうつもりでは。

お　熊　わかってるって、これでも仲見世でやり手をしてたんだ、自分の値踏みも知ってるよ。五十文。さあ、はやくやっとくれ……どうしたんだよ、そんなにいやかい、この年増が。

内蔵助　いやちがうんだ、俺は女を買いにきたのではない。

お　熊　ハハハ、こりゃ驚いた、女買う以外に何するってのさ、この吉原で。

内蔵助　気の滅入ることがあった。自分がこの世で最低の男と思えるほど滅入ることだ。だから、こういう場所で一生懸命働くお前たちの話を聞き励みにしようと思ったんだ。

お　熊　ふうん、あんた学のある人かい。

内蔵助　なぜだ。

お　熊　学のある人はそういう青臭いこと考えるもんさ。こんなとこ来ても励みになんかなりゃしない。ますます気が滅入るだけだよ。

内蔵助　すまなかった。（行こうとする）

お　熊　まあお待ちよ、話だけでもしようじゃないかさ、あたしもヒマこいて弱ってんだよ、よその女郎にそう思われるのが嫌だから時々物陰に隠れてうめき声なんかあげたりしてさ、ハハハ、さあ、何が聞きたいんだい、答えてあげっから。

内蔵助　しかしそう言われると、

お　熊　遠慮するんじゃないよムシロ女郎に。

内蔵助　じゃ第一問。

お　熊　よし来た。

内蔵助　ソバとウドン、どっちが好き？

お　熊　そんなことが聞きたいの。

内蔵助　ウソウソ、照れ隠し、ちゃんとやります。

お　熊　どうぞ。

内蔵助　さっき仲見世にいたとき言ったがなぜこんなところに来た。

お　熊　花魁が駆け落ちしちまったんだよ、あたしが見てた子。おかげでその花魁の借金肩代わりさせられちまってさ。

内蔵助　そうか苦労したな。

お　熊　去年の春までは仲見世に出てたんだよ、その時のことが夢のようさ。いっしょになりたいと思った人もいたし。

内蔵助　女郎も本気で客を好きになるのか。

お　熊　そりゃなるさ、それがなかったらこの商売、ほんとに人間以下だよ。だけど本気で好きになるからあたいたちは人間でいられるんだ。

内蔵助　馬鹿なことを聞いた。許してくれ。

お　熊　あたいも何度も惚れたけどさ、最後に惚れた客が一番だったね。タクちゃんていうの。

内蔵助　タクちゃん……!?

お　熊　反物屋の若旦那みたいなふりしてたけど、あたいにはちゃんとわかった、ほんとは偉いお侍さ、さっぱりしてて上品でさ、もしかしてもしかするとどっかのお殿様かもタクちゃん。

内蔵助　タクちゃん知ってるぞ俺も。

お　熊　えーっ、タクちゃんのお友だち？

内蔵助　お前の名前はなんだ、仲見世に出ていたときの。
お　熊　あたしかい、春乃。
内蔵助　そうか、そうだったのか。
お　熊　なんだよ、なに一人で感心してんのさ。
内蔵助　風さそふ花よりもなお我はまた　春の名残りをいかにとかせん、タクちゃんがお前のことを詠んだ歌だ。
お　熊　そう、うれしい、タクちゃんは元気？
内蔵助　ああ、元気。
お　熊　じゃあどうして来てくれないんだろ、あたし花魁やめて待ってたのに。
内蔵助　商売の都合で西のほうへ行ったんだ、反物屋の旦那だからな。大坂に支店を出した。
お　熊　そうだったのかい、じゃ仕方ないね。
内蔵助　どんな人だった、タクちゃん。
お　熊　そりゃいい人さ、ギラギラしたところがなくて、あたいに優しくしてくれた。女郎だからって見下さないで、あたいを人間として扱ってくれた。

内蔵助　ああ、誰にでもそうだ、タクちゃんは。

お　熊　曲がったことは大嫌いで、金に飽かしてわがまま言う客を大声で怒鳴りつけたの。

内蔵助　ああ。

お　熊　大好きだったわ、あたい。男の中の男だと思った。あんたも好きかい。

内蔵助　ああ、大好きだ。男が惚れる男だ。

お　熊　よかったよあんたと話ができて。タクちゃんのことが思い出せて。あんな人に出会えたんだから、もうどうなっちまってもいいね。

内蔵助　そうだ、どうなってもいい。

お　熊　いやだよ、あんたがタクちゃんの友達だとわかったら急に恥ずかしくなってきた。さよなら、タクちゃんによろしく。（オペ室花道へ）

内蔵助　こんど会ったら言っといてやるよ、たまにはお前に会いに行ってやれって。

お　熊　いいよ、あたいはこんななっちまったから。

音楽。お熊、オペ室花道より退場。

内蔵助に雪が降る。そして何かを決意するように奥花道へ退場。

二階に討ち入り姿の黒兵衛登場。伝令書を読み上げる。

黒兵衛　赤穂の者二十四名、その他の者二十四名、四十八名の浪士に告ぐ。かねてよりの懸案であった本所吉良邸、内情偵察は磯貝十郎左エ門の活躍によって成され、我々は詳細なる見取図を得ることができた。また、大原源吾の手柄により、十二月十四日、吉良邸において茶会が行われることが判明。上野介の在宅が確実な日は年内この日のほかなく、当日深夜に討ち入りを行うこと決定する。各自その日まで家族を十分いつくしみ、刺身の好きな者は刺身を、饅頭の好きな者は饅頭を、腹一杯に食っておけ。屋敷は通常、八十名が寝起きしている。警護の侍はつわもの揃いだ。親心で言っておく。下着は新しいものを。

オペ室花道から幸、客席花道からお直登場。

幸　ほんとうならひっぱたいてやるとこだけど、あんたには女の友情を感

じているのよ、お直さん。だって同じ男を愛した間柄ですもの。

お直　おかみさんのお心づかいに感謝いたします。本来は柱の陰からそっとお見送りする身。それなのにおかみさんと並んでその時を迎えることができるのですから。

幸　雪になったわねえ。

お直　あの人の思い出のように積もります。

幸　どんな思い出があるの、お直さん。

お直　とても一言では申せません。それに、

幸　それに何？

お直　とてもおかみさんの前では口にできませんわ。

幸　あらどうしてかしら、どうせ一緒にダンゴを食べたとか、草餅を食べたとか食べ物ばかりの思い出でしょう、あたしに遠慮することなんかないのに。

お直　フフッ、知らないくせに。

幸　何よ強がり言っちゃって、聞いてんのよあの人から、あんたとはなんにもないんだって。

お直　ふん、あってもおかみさんに言うわけないでしょう。

幸　ほらほら、なんにもない人に限って秘密のあるふりするのよね、あたしの友達にも一人いるのよそういうのが「彼？　ふ、やめようよ彼の話は」なーんて言っちゃってほんとうはなんにもないんだから馬鹿よね女って。

お直　あたしだって知ってるもん、幸さんには思い出がいっぱいあるつもりでもねえ、八つぁんには枕絵の女の思い出しかないんだもんね。

幸　キーッ、何言うのよこの小娘。

お直　やめてよその声、更年期障害。

幸　いったわね。

お直　いったわよ。

幸　（立ち上がり）やるならやるわよ。

お直　（立ち上がり）願ったりかなったりの展開だわ、いつかあんたとお相撲を取ってやろうと思ってたのよ。

幸　どすこいっ。

お直、幸、相撲を取る。オペ室花道から、八、登場。討ち入りの衣装である。

八　何やってんだおめえら。

音楽。お直、幸、あわてて正座し、

幸　失礼しました。とうとう迎えた討ち入りの日、妻として動揺のあまり、お相撲を取ってしまいました。

お直　お役目ご苦労さまでございます。

八　あ、そういう堅苦しいのはやめよう、普通にしようよ、なんか俺、緊張しちゃうからさ、ハハ、どうこの格好。

幸　似合うわとっても、惚れ直しちゃった。

八　あ、そう、へんじゃないかな、なんかほらできそこないの五月人形みたいな。

お直　そんなことない、大人になった金太郎さんみたい。

八　ハハ、うまいこと言うねお直ちゃん、ありがとう。

幸　やだよ、見送る時は一杯言ってやろうと思ってたのに、ぜんぶ忘れちまった。

八　うん、

お直　あたしはイッコだけ言うことがあるの、八つぁんに会えてよかった。

八　うん、

お直　楽しい思い出ばかりなのに涙が出るわ。こんな日に雪が降るなんて出来すぎだね。

幸　そうだね、出来すぎだね。

八、二人の肩を抱いて、

八　あんがとな、おめえらに会えてあんがとな、俺はうれしいよ、幸せもんだよ、こんなふうに馬鹿な女房とどっかおかしな長屋小町、ふたりの女に見送られて男の花を咲かすんだからよ。

幸・お直　わーん。（と八の胸に顔を埋める）

八　幸、ちゃんと戸締まりしろよ、肥溜めは三月も貯めるんじゃねえぞ。

幸　わかってるよ。

八　お直ちゃん、手相には気をつけろ、たいてい下心があんだからな。

お直　気をつけるよ。

八　さあ、もういかなくちゃなんねえ。

八、立ち上がり、

八　最後に一つだけ言っておく。俺は八だ。赤穂浪士なんかじゃねえ。イキオイでここまで来ちまったが、後悔なんかしてねえぞ。だってよ、出会い頭が江戸の町じゃねえか。「どこ行くんだい」「ちょっと深川」「じゃついてっちゃお」その呼吸が人間じゃねえか。俺の足は震えてんだ。小便ちびって気持ちわりいんだ。だがよ、この濡れたふんどしが、雪空にはためく戦いの旗だぜ。幸、

幸　あいよっ。

八　俺の骨、海に撒いて魚のエサにしてくんな。

幸　（火打石を打って）いってきな。

吹雪の音。八、奥花道へ退場。

お直　ほんとかよ、八つぁん、赤穂浪士じゃなかったの？　幸さん、知って

た？

幸　知ってたさ。

お直　じゃどうして行かせるんだよ、赤穂浪士じゃないのに討ち入りするなんて馬鹿みたいじゃない、止めないの？　どうして行かせるの？

幸　だって八つぁん、畳じゃ死ねない馬鹿だもの。

幸、オペ室花道へ退場。

お直　負けた。

吹雪の音。お直、客席花道へ退場。奥花道より、貞四郎、お道登場。

お道　八つぁん、討ち入りに行ったわね。

貞四郎　俺には関係ないことだよ。

お道　貞さん、ほんとは赤穂浪士なんじゃないの？　だって寝言で言っていた、赤穂の塩豆、赤穂の塩豆って。初めて会った時に言っていた、や

らなきゃいけない志ってそのことだったんじゃないの？

貞四郎　変わるのが人さ。吉原の明かりが俺を変えたんだ。

吹雪の音。貞四郎、お道、奥花道へ退場。

客席花道から八とスカピンも登場。討ち入り装束である。

スカピン　こら八つぁん、なにグズグズしてんだよてめえは。

八　すべってこらんじまったんだからしょうがねえじゃねえかよ。ああ、ビショビショで気持ちわりいや小便と雪がまじっちゃって。

スカピン　しかしワクワクするなあ、初めてのほんとの戦だと思うと全身が熱いぜ。見ろ、降りしきる雪も俺のカラダで熱湯だ。フー、ヒェーイ、オーケイベイビーフー。

八　なんかヘンだぞてめえ、ビビッてんじゃねえのか。

スカピン　馬鹿なこと言うなよ八つぁん、こう見えても俺は侍だぜ、命の一つや二つ投げ出す覚悟はいつだって、（しゃがみこみ）できてねえんだよーこわいんだよ八つぁん、ゆうべも眠れなくて酒がねえから水ばっかり飲んでよー、今朝起きたら三年ぶりに寝小便しちまっててよー。

八　いったいいくつだてめえは。
スカピン　二十五。
八　じゃ、どうしたんだよ、その額はよ。
スカピン　苦労したんだよ。ある朝起きたら抜けててよ。
八　悪いことときいちゃったな。
スカピン　八つぁんいくつだよー。
八　十八。
スカピン　ウソつくんじゃねえよー。
八　冗談だよおめえの気持ちを軽くしてやろうと思ってよ。
スカピン　討ち入りの話きいて、一瞬、熱くなって乗ったけどよ、根拠がねえから俺、気持ちが持続しねえんだよな。
八　うん。
スカピン　喧嘩だってそうじゃんよ、ぶっ殺してやると思ってもよ、明日になればもうどうでもよくなるじゃん。
八　うん。
スカピン　おめえだってそうだろ、ほんとは赤穂のサムライでもなんでもねえんだろ。

八　知ってたのか。

スカピン　黒兵衛に聞いたんだよ。だけどそれ言ったらおめえがツムジ曲げるって口止めされててよ。

八　そうなんだ。

スカピン　だからって俺はおめえを尊敬すんのやめねえぜ、赤穂浪士はウソでも、なんかその、ノリっちゅうの？　やっちまえって気持ちはほんとじゃねえか。だがよ、俺の中には侍の悪いところがまだ残ってるらしい。討ち入りしたら、もしかしてアッパレだと将軍様にほめられて、また仕官できるんじゃねえかって、そういうスケベ心があるのよ、そのスケベ心が気持ちビクつかせてよ、俺に寝小便させちまったんだ。

八　スカピンよ。

スカピン　おう。

八　馬鹿つら抜くのは、つれえな。

スカピン　つれえよ。

オペ室花道から、長太登場。討ち入り装束。「報道」の腕章をしている。

長太　やあ、お待ちしてました。みなさまの元禄堂です。
スカピン　てめえも討ち入りする気か。
長太　いえ、報道の使命です。ご活躍を克明に書かせていただきますよ。
八　集まりはどうでえ。みんなちゃんと橋のたもとに来てんのか。
長太　それが全然来てねえんだ。すずさんと黒兵衛さん、腕組みしながら黙りこくってましてね。とうとう黒兵衛さんがさっきポツリと言いましたよ。「このままじゃできないな」って。それじゃ困るんだあたしたち。もう明日の号外、刷りに入っちゃってるんですからね。さ、早く行ってお二人を励ましてくださいな。
八　逃げようか、スカピン。
スカピン　なんだよ、八つぁんまでそんなこと言っちまうのかよ。
八　だって俺たち二人で討ち入りなんてたまんないよ。斬ったり斬られりしなきゃいけねえんだよ。
スカピン　そりゃそうだよ討ち入りだもん。おめえ、斬ったり斬られたりしねえつもりだったのかよ。
八　うしろのほうでワーワー騒いでりゃすむと思ってたんだよ。

長太　なにグズグズ言ってるんです。早く行かねえとすずさんプッツンしちまいますぜ。

八　あのさ、日、変えよう。

長太　え？

八　ほら、雪降ってて滑りやすいし。

長太　雪だからいいんじゃないですか、人通りも少なくて。

八　いや、なんかこう、シンシンしすぎちゃってノリが悪いじゃねえか。

長太　なに言ってるんです、討ち入りですよ。そういう大事なことノリで決めちまうんですかあんた。

八　俺の一生、ノリでやってきたんだよ、最後だってノリが悪けりゃしまらねえんだよ。

長太　書けないよそんなこと、赤穂浪士、ノリが悪くて討ち入り中止、なんて。

八　そのへんは適当にごまかせ。芝居だってあんだろ、病気のため出演できませんとかよ。

長太　書けねえって。

十郎　待て待て待て。

オペ室花道より討ち入り装束の浪士たち登場。
磯貝十郎左エ門、大高源五、吉田沢エ門、勝田新左衛門、堀部安兵衛、吉田忠左エ門の面々である。

十郎　山。

八　まゆげ。

スカピン　馬鹿野郎、シリトリじゃねんだ、合い言葉だよ黒兵衛が決めたじゃねえか。すんません、もう一度お願いします。

十郎　山。

スカピン　川。

浪士たち　あこーろーしー。

八・スカピン　ハハー。（とひれ伏す）

浪士たち、フォーメーションを組む。

スカピン　見ろ、俺たちみてえな寄せ集めじゃねえ、四十八人のうち半分は本物

の赤穂の浪士だ。さすが統制が取れてるじゃねえか。
八　おもしれえな、もういっぺんやってみようか。
スカピン　山。
源　五　川。
浪士たち　あこーろーしー。
八・スカピン　ハハー。
長　太　あなた方が来りゃ安心だ。さすがだね、やる気がちがうね。さあ、いきましょう、すずさんたちがお待ちですよ。
十　郎　いや、待たれ。先ほどより、お二人の話を伺っていたのだが、我々もまた、討ち入りを目前に躊躇しているのだ。
長　太　なんでよそれは。
十　郎　ノリが悪い。
長　太　どうしてそうかなあんたたちは。
十　郎　実は我ら赤穂軍団の仲良しさんが集まって別れの盃をかわしていたのだ、そこのつぼ八で。
長　太　飲むなよそういうとこで。
源　五　すると寄せ集め軍団の仲良しさんたちもやってきた。やあやあ、奇遇

奇遇ということではじめは楽しく飲んでいたのだがそのうち様子があやしくなってきた。

山。

八　川。

十郎　あこーろーしー。

浪士たち　ややこしくしないでよ話を、で、どうあやしくなったんです？

長太　吉良に恨みはないと言い出した。

沢エ門　仇討ちをしたくて討ち入るのではないと奴らは言うのだ。

安兵衛　てっきり僕らの気持ちに賛同してのことだと思ったのに。

新左衛門　面白いから、スカッとするからなどと不届きなことを。

忠左エ門　なるほど、見解の不一致というやつだね。

長太　山。

八　のっちゃだめですよ。

長太　スカピン。

八　なに？

スカピン　こないだの休みはどこ行ったの？

八　お酉様。でっかい熊手買ってさ、

スカピン

八　ああ、なかなか風流なことしてんじゃない。その前は？

スカピン　山。

源　五　川。

浪士たち　あこーろーしー。

長　太　やめなさいって。

十　郎　というわけで、奴らとは決裂した。あんな連中と討ち入りはできん。

長　太　よわっちまったなどうも。

オペ室花道から討ち入り姿の三味蔵登場。

三味蔵　おーい、元禄堂、てえへんだ。

長　太　よっ、三味蔵、名調子！

三味蔵　橋のたもとに寄せ集め軍団が集まってー、黒兵衛たちに啖呵をきった。「あの赤穂のヘッポコ侍たちとは討ち入り出来ねえってよ。だいたいてめえらがヘッポコだから俺たちが名乗り出てやったんじゃねえか。それをいまになって志が低いの不届きだのヘッポコポコのポコなこと言うんじゃねえや」。

源　五　そこまで言うか奴ら。
安兵衛　もう討ち入りやめだ。
十　郎　やめだやめだ。
長　太　あー、号外、無駄刷りだー。

オペ室花道からすず、それを追って黒兵衛登場。討ち入り装束である。

黒兵衛　すず殿、思い直してくだされ、すず殿。
すず　いえ、思い直しません。私がいけなかったのです。討ち入りをあせるばかりに赤穂に関係のない浪人や町人を集めてしまいました。その者たちに仇討ちの心が弱いのは当然です。案の定、事を目前に騒ぎだしました。初めから私の考えに無理があったのです。
スカピン　おねえちゃんどうするつもりなんだよ黒兵衛。
黒兵衛　寄せ集め軍団は解散し、赤穂の者二十四名だけで討ち入ると。
すず　さあ、赤穂の皆さん、やっぱり頼りになるのは皆さんです、私たちだけで討ち入りましょう。

安兵衛　ちょっとまっちくれよ、おねえちゃん。
すず　なんですか安兵衛殿。
安兵衛　吉良の屋敷には八十人詰めてるって話だぜ。死ぬぜ俺たち。
沢エ門　そうだよなあ。
すず　初めから死ぬのは覚悟ではありませんか。
十郎　しかし吉良の首が取れなくては意味がない。
忠左エ門　無駄死にさせる気？　おねえちゃん。
すず　いえ、そんなつもりは。
源五　甘く見てんじゃねえのおねえちゃん、刀こわいんだよ、血でるんだよ。
沢エ門　どうなんだよおねえちゃん。
新左衛門　あんまり言うと泣いちゃうよ。
すず　泣きません。
忠左エ門　泣くぞ泣くぞって言うとほんとに泣いちゃうんだ女は。
すず　泣きません！
黒兵衛　この期に及んでなんたること、すべてはこの黒兵衛の不始末、ただちに腹をかっさばいて。

と、切腹しようとする黒兵衛を皆、大あわてで止める。

すず　おじさま、そんなことしても無意味です。私が一人で討ち入ります。

と、奥花道へ走ろうとするのを皆、大あわてで止める。

内蔵助　（声）はやまるな、すず。

二階から内蔵助登場。討ち入り装束である。

十郎　大石殿！

黒兵衛　やる気になったか大石。

すず　なにしにきたのです父上。

内蔵助　見りゃわかるだろ、討ち入りだよ。

すず　なによ、そんな気ないくせに、その格好がしたかっただけではないですか。

内蔵助　馬鹿言え、風車じゃないんだぞ。討ち入りをする。吉良の首を取る。いいな、おまえたち。

皆　おうっ！

すず　なによ、あたしが言ってもグズグズしてたのに、父上が一言いえばそれでいいのですか。

源五　人を動かすのは理屈じゃねえんだ。

十郎　何を言うかより、誰が言うかなんだよっ。

内蔵助　すず、おまえには心配かけた。すまん。

すず　何よ、いまさら。

内蔵助　八つぁん、あんたが俺の横ツラをひっぱたいてくれた。ありがとう。

八　うれしいねえ、おめえについていくぜ、クラ公。

内蔵助　黒兵衛、吉良邸の見取図を見せてくれ。首尾はどんな具合だ。

黒兵衛　表門と裏門の二手に分かれる。そして同時に火事だと騒ぎ立て出てきた者どもをできるだけ多く庭で始末する。あとは雨戸を蹴破り、人数の殺傷よりも吉良の発見を第一義とする。見つけた者は笛を鳴らし全員がただちに集合する。

内蔵助　結構。表門は俺が、裏門はすずが隊長となろう。いいな、すず。

すず　納得できません、私は。

内蔵助　なぜだ。

すず　あれほど反対していた父上がなぜ討ち入る気になったのですか。風車の風が変わったの？

黒兵衛　まあいいではないか、これですず殿の念願通り大石の名を立てることができる。

すず　それに浪士たちの心が一つになっていません。赤穂の旗のもとに一つにならなければ、この討ち入りは不毛です。

内蔵助　赤穂の旗はいらないんだ、すず。

すず　何をいうの。

内蔵助　この討ち入りは赤穂の名誉のためではない。主君への忠義を尽くす武士のものでもない。

黒兵衛　では何だ、大石。

内蔵助　この討ち入りは、祭りだ。果たせぬ士官への夢を思う心。生まれたからには花のように散りたいと願う心。侍は侍であれと叫ぶ町人の心。さまざまな江戸の心が渦巻く元禄の祭りだ。

黒兵衛　では大石、お前の心はなんだ。

内蔵助　俺の心は、友達だ。

音楽。

内蔵助　浅野の殿を、俺は好きだ。主君としてではなく、友達として、俺は何かをしてやりたい。赤穂の海で泳ぎ疲れ、ただの裸の男だった日に俺は戻る。立て、阿呆の旗のもとに！

浪士たち、立ち上がる。

内蔵助　すすめーっ。

内蔵助に続いて浪士たち奥花道へ登場。すずも奥花道へ向かう。

黒兵衛　すず殿。

すず　吉良の侍を見て父がおじけづかないか心配です。ハッパをかけるのよ

おじさま。

黒兵衛　ハッ。

すず、黒兵衛、奥花道より退場。

八　見ろ、舞台へ出ていく役者のようだぜ。

スカピン　ノリが悪いのは直ったか。

八　お江戸の拍手が聞こえるよ。

スカピン　おうっ。

八、スカピン、奥花道より退場。

長　太　やったぜ、これで号外無駄刷りにならねえ。見出しは、元禄お祭り蔵だ。

長太、奥花道へ退場。

客席花道から沢エ門、安兵衛登場。舞台上で吉良勢と戦う

（むろん吉良勢は仮想である）。激しいチャンバラ音。すず、黒兵衛、奥花道より登場。戦いながらオペ室花道へ退場。奥花道より十郎左エ門、忠左エ門登場し、オペ室花道へ走りながら退場。内蔵助、奥花道より登場し、舞台上で戦いオペ室花道へ退場。追って、安兵衛退場。沢エ門、奥花道へ退場。奥花道より八、オペ室花道よりスカピン登場。舞台中央で背中合わせになり。

八　よお、お侍ってのはいっつもこんなすげえことやってんのかよ。

スカピン　やってるか、本物の浪士たちだってこんな戦は初めてだぜ。

八　かっこよくねえんだなチャンバラって。スパスパなんて切れねえんだ。ボコボコって、マグロたたいてるみてえな音がしやがる。

スカピン　人間の音だよ。胃袋や臓物が一杯詰まった人間の音だ。

八　てめえは何人ひと斬った事があるんだ、スカピン。

スカピン　ねえよ一人も。

八　なんだ俺と同じじゃねえか、それでよく侍だなんて言ってたな。

スカピン　しょうがねえだろそういう世の中だったんだから。

八　どういう気分なんだろうな人斬るってのはよ。

スカピン　わからねえ。

八　人斬ったら違うものになれると思うかてめえは。

スカピン　わからねえ、でも斬らねえ俺よりは背骨がピンと張る気がするぜ。

八　俺はだめだ。死ぬまで夢にうなされる気がする。その違いは何だろうな。

スカピン　たとえばナマクラでも刀をぶら下げて生きてた違いよ。いつかこいつを抜くときのために生きてるって思った違いよ。あぶねえ八。

八が身をかわす。

スカピン　いま初めて会ったてめえ、てめえのために俺は生きてた。

スカピン、斬る。スパッと人が斬れる音。

八　やった、スカピンやった、てめえは侍だ！

スカピン　かーちゃーん！

八、スカピンを引っ張って奥花道へ退場。

オペ室花道より長太登場。

長　太　元禄十五年十二月十五日寅の上刻、本所吉良邸を襲った赤穂浪士は果敢に宿直の侍たちを切り倒し早くも形勢を優位にした。障子は破れ、襖は倒れ、書院の床の間、掛け軸の下に転がる壷には主をなくした子猫が隠れる。亡き母の形見だろうか、風呂敷包みを大事に抱え、茶坊主が一人、逃げてゆく。

長太、奥花道へ退場。ロビー花道からすず、黒兵衛登場。

す　ず　吉良を捜しましょう。逃がしてしまったら元も子もありません。

黒兵衛　すず殿。

黒兵衛、すずを背中から抱きしめる。

すず　こんな時に何をするのおじさま。

黒兵衛　こんな時だからするのです。次の襖をあけたらあなたも私も斬り殺されるかもしれない。だからいま恥を忍んで申し上げます。お慕いしておりました。

すず　おじさまには感謝しています。斬られる時はいっしょですよ。

黒兵衛　はっ。

すず、黒兵衛、客席花道へ退場。舞台に素晴らしいライティング。

奥花道から内蔵助以下、浪士たちが刀を構え登場、舞台をゆっくり回る。

内蔵助　穏やかな赤穂の海を私は愛しておりました。

穏やかな亡き殿のお人柄を私は愛しておりました。

春の盛りの殿中で、その殿のお心に、激しい嵐が吹き荒れたのです。

その嵐を起こしたものを私は憎みます。

内蔵助　穏やかな赤穂の海を私は愛しておりました。

浪士たち　穏やかな亡き殿のお人柄を私は愛しておりました。
春の盛りの殿中で、その殿のお心に、激しい嵐が吹き荒れたのです。
その嵐を起こしたものを私は憎みます。

長　太　（二階から呼子笛の音と共に）吉良を捕まえたぞー。炭小屋に隠れてたんだ、自分で顔を隠している。こいつが吉良に違いねえ。吉良上野介を捕まえたぞー。

オペ室花道から八、スカピン、吉良を捕らえて登場。
吉良は体にむしろを巻き、自分の顔をかくすためすっぽり袋をかぶっている。
（まだ顔は見えないのである）

客席花道に、すず、黒兵衛が登場。皆が見守る中、二人は吉良を舞台へ引き立てていき、座らせる。

と、吉良はむしろを投げ捨て、合口を振り回しながら最後の抵抗をする。

皆が息を飲む中、内蔵助が顔を隠した袋を取る。

八

吉　良　あ、一八……

内蔵助　何が一八だ、もう逃げも隠れもせん、わしが吉良上野介だ。赤穂藩家老大石内蔵助だ。吉良殿、みしるし頂戴いたす。

吉　良　練りアンか、粒アンか。

十　郎　それはおしるこだ。みしるしとは首のこと。

吉　良　まぶたはたるみ、シミが出て、おまけに最近は虫歯が痛くて甘納豆も食べられん。さあ、こんな首などもっていけ！

内蔵助　われら浅野内匠頭に仕えし浪士たち、いまは、おのが阿呆の心に仕える阿呆浪士。ただ忠臣の心でなく、ただ武士の意地でなく、おのが阿呆として吉良殿の首、頂戴す。

吉　良　生きも生きたり六十年。

「甘納豆　口にいっぱいほおばって　死んでいきたい雪のあけぼの」

皆、舞台中央の吉良を丸く取り囲む。その輪をしだいに小さくして吉良を見えなくする。吉良の悲鳴。首を入れた血染めの袋をもった内蔵助の腕が高く上がる。音楽ＯＵＴ。吹雪の音。内蔵助の腕が下がり、皆、ゆっくり舞台四方に散らばる。

長　太　　号外だ！（奥花道より退場）

すずが内蔵助と見つめ合った後、奥花道へ動く。すず皆に一礼する。

黒兵衛と内蔵助を除く皆、すずに礼をする。すず、奥花道を走り去る。

内蔵助は黒兵衛を見る。黒兵衛、内蔵助を見る。内蔵助、うなずく。

黒兵衛、奥花道へ動き、正座し、皆に礼をする。内蔵助を除く皆、礼をする。

黒兵衛、奥花道を走り去る。

皆正面を向く。激しい吹雪の音。内蔵助が奥花道へ進み皆を

振り向く。

浪士たち控える。新左衛門が嗚咽をもらす。内蔵助振り返って、音楽。奥花道を歩いて退場。

続いて浪士たち退場。

三味蔵、オペ室花道より登場。

唸り屋三味蔵、討ち入り後日談の一席

三味蔵　回向院前から御船蔵へ、隅田川の東南を南下し、永代橋を渡る頃、昇る朝日は晴れ晴れと、霊岸島が稲荷橋、鉄砲洲、汐留橋、金杉橋、そして高輪泉岳寺に到着しましたのは、辰の刻。吉良の首を井戸で荒い、浅野内匠頭の墓前に供え、ついに浪士たちの討ち入りは終わりました。これは、その数日後のお話でございます。

〜ここは高輪泉岳寺

内匠頭の墓の前

こう花たむけ手を合わせ
首うなだれたひとりの武士
帰りに立ち寄る門前の
茶店の床机に腰下ろし

（武士）「ごめんよ」

（婆）「まあ、まあまあまあ、これはこれはお侍さま。ようこそおいでくださいました。さあさあさあさあ、お茶でございます。ええ。これは羊羹。ええ。お団子もここに。うん、それから。これはね、泉岳寺名物討ち入り饅頭。ホホホ……そしてね、これはね吉良の首洗い最中、えへへ。今あの、甘酒も温めておりますからね」

（武士）「おばあさん、拙者まだ何も頼んじゃおらん」

（婆）「まあいいじゃありませんか。今日ね、あたしゃもう嬉しくて嬉しくて、大サービスでございますよ」

（武士）「何かいいことでもありましたか」

（婆）「ありましたかどこじゃございません。お侍さま。久しぶりに

ね、江戸っ子がすかーっとするような気持ちのいいお話でございましてね」

（武士）「ほお、おばあさん。もしよかったら、拙者にもその話ちょっと聞かしてくれまいか」

（婆）「ええ、結構ですとも結構ですとも。ええ。実はねお侍さま。先日討ち入りをして、江戸中の大変な評判になったあの赤穂浪士についてなんですがね。あたしゃもう、瓦版読んだ時はそりゃあびっくりしましたよ」

元禄堂の瓦版によると、一度は浪士たちの討ち入りをたたえ、あっぱれな者どもと顔をほころばせた将軍綱吉でありましたが、あとで調べてみて驚いた。なんとその半分が、ただの魚屋であったり、ただの貧乏浪人であったり、赤穂とは縁もゆかりもない者ばかり。町人や浪人が討ち入ったのではこれはただの暴動。幕府に対する抵抗運動ということになってしまう。そこで、町人たちが討ち入ったということをひた隠しにし、全員が赤穂の浪士たちであったと発表したのでございます。討ち入った町人や貧乏浪人たちは、行方不明になっている赤穂の

浪士として、切腹することとなりました。魚屋の八は横川勘平宗利として。浪人スカピンは間新六光風として。しかし、そのことを知った大石内蔵助が、

〝その者たちは赤穂の武士として討ち入ったのではない
正直な裸の人間として命をかけた
どうかひとりひとりのほんとの名前を歴史に残してもらいたい

なんどもなんども幕府に懇願しましたが、とうとう聞き入れてはもらえませんでした。魚屋八つぁん、浪人スカピン、畳屋長五郎、火消し一蔵、船頭寅の介。本当の名前が記された内蔵助の名簿は、幕府の手文庫に深く眠ってしまったということでございます。

（婆）「嬉しいじゃありませんか。ねえ。江戸っ子はね、江戸っ子はこうでなくちゃいけませんよ。赤穂の浪人たちがまだこの世にいくらもいて、まごまごしてるってときに、おめえたちがやらねえんだったら、この俺がやるー！　命を投げ出した魚屋の八つ

ぁん。これがほんとの江戸っ子てもんですよ。あたしゃね、それを知ったときにゃもうね、嬉しくて嬉しくて。それから、その八つぁんたちの名前を一生懸命残そうとしてくれた大石内蔵助という方も、立派な人物ですねえ。ところがね、お侍さま。何でも聞くところによると、このたび、討ち入りした浪士たちの切腹が決まったってんじゃないですか。ええ！　まったく、お上は何を考えていることやら。あたしゃね、もし八つぁんやスカピンが切腹させられちまったら、あたしのお店の脇にお墓建ててね、大石様が残せなかった八つぁんたちの名前を、あたしがね、あたしが残してやろうと思うんですよ。そしてこの泉岳寺にお参りに来る討ち入りしそこなった赤穂の浪人たちに、あたしの建てたそのお墓見せてね、あんたたちよりこの人たちのほうが、よっぽど侍らしいよー！　こうね、こうね、こう一言、言ってやろうと思ってね。あっ！　あはははは。なんですね、もうさっきからひとりでべらべらべら、申しわけございません。あんまりね、嬉しかったもんですから、つい長話を。ささ、お侍さま。お茶のお代わりを……あら。お侍さま。

あなた。泣いていらっしゃるのですか？　お侍さま！」

〜寒さに肩を震わせて
流れる涙ふきもせず
その場急いで立ち去った
武士の背中に舞う枯葉
どこで鳴るのか鐘の音
家路を急ぐ鳥の声
沈む夕日に背を向けて
武士の行方はどこへやら

そんなことがあった翌年。明けて元禄十六年。春の風ぬるむ二月四日が切腹の日。

その日のことを語り始める前に、私たちにはやらなければいけないことがございます。
吉良上野介。退場！

吉良上野介が立ち上がる。吉良、奥花道へ退場。続いて三味蔵も退場。

オペ室花道からお直登場。手を合わせ、

お直　八つぁん、細川様のお庭でこれから切腹する八つぁん、あんたが赤穂浪士でなかったと聞いて、最初はウソつきと思ったけど、いまでは立派だと思っているわ。ウソをつきっぱなしで逃げるなら卑怯だけどほんとに切腹しちゃうんだもの。それはもうウソじゃなくて、ほんとのことだと思うのね。もしもあたしにモテようと思ったのがウソの始まりなら、ここまでやるのは最高の愛の表現だよ。あたしは日本一幸せな女だと思う。だけどお姉ちゃんは可哀相なのよ。弥助さんが大石内蔵助だったといってもそんなわけがないと信じなくて、いまでも風車売りの旅から帰ってくるのを待っているの。あれじゃ当分、出直せない。また出戻りに逆戻りね。明日あたりまたドブに落ちるんじゃないかしら。

おはんの悲鳴。ドブに落ちる音。

お　直　今日だったわ。

八、奥花道より登場。

八　お直ちゃん。

お　直　誰？

八　俺だよ、八だ。

お　直　八つぁん、どこにいるの？

八　細川様のお庭でい、切腹の順番を待ってんだ。

お　直　どんな格好してんのよ。

八　こんな格好でえ。

舞台に白装束の八、登場。

八　どうでえ、お直ちゃん、俺が見えるか。

お直　見えるよ、真っ白な着物を着た八つぁんがちゃんと見える。

八　そうけえ、愛ってのはたいしたもんだなあ。理屈を飛び越すぜ。

お直　あたしにお別れをいいに来たのね。

八　ああ。幸のとこにも行ったんだけどよ、あいつガーガーいびきかいて昼寝してやがってな、こんなまぬけに挨拶してやるかと思ってよ、お直ちゃんのとこきたんだ。

お直　ありがとう、うれしいよ。スカピンさんたちは？

八　もういっちまったよ、あいつは嬉しそうだったなあ、切腹ってのはこっちが腹に刃を当てた途端、首きっちまうものらしいんだけどよ、あいつは介錯なんかいらねえって自分で腹かっさばきやがった。

お直　内蔵助さんは？

八　あいつも行った。最後まで名前を出してやれなかったってグダグダあやまりやがってよ、あんまりうるせえから怒鳴ってやったんだ、名前なんかいらねえって、散った桜は、名前なんかなくてもきれいなもんだってよ。

お直　かっこいいよ、八つぁん。

八　それより困っちまったのは辞世の句ってやつだ。そんなもん詠んだこ

とねえからからっきし勝手がわからなくてよ、しょうがねえから俺が好きなもんの名前ならべてやった。

お直　どんな歌？

八　マグロサバ　火事に喧嘩に酒花魁　屋根から小便　お幸お直

お直　ありがとう、うれしいよ！

八　生まれ変わりってあるんだってな。

お直　ああ、八つぁん、何に生まれ変わるの？

八　サバだ、あいつの刺身が一番うめえ。すずしくなったら、脂の乗ったサバ買って刺身で食ってくんな。とろけるように旨かったら、そいつがきっと俺だからよ。

介錯人　（声）横川勘平宗利。

八　あ、俺だ。（立ち上がる）

鐘がゴーンと鳴る。

八　七つの鐘だな。この鐘が鳴り終わるころには桜の花びらよ。

お直　八つぁん、何かもう一言いって。

八　神田に薮って蕎麦屋があんだろ。

お直　うん。

八　あそこの蕎麦、つゆたっぷりつけて食ってみたかったぜ。さよなら。

八、奥花道に退場。

お直　八つぁーん。

お直、オ。ヘ室花道へ退場。

鐘が鳴り続ける中、奥花道から野菜籠をもった貞四郎登場。

舞台中央に正座し、たたんだ手拭いを自分の前に置き、合口を手に。

その時、奥花道から野菜をもったお道登場。

お道　なにしてんのよあんた！

貞四郎　死なせてくれ、この鐘が鳴っている間に、俺を赤穂浪士として死なせてくれ。

お　道　冗談じゃないわよ、勝手がすぎる、最後まであたしと一緒だって約束したじゃない。

貞四郎　すまない、許してくれ、俺は武士として死にたい、自分で腹をかっさばきたい、俺のわがままを許してくれお道。

お　道　させるもんかあたしが。

お道、かっさばこうとする貞四郎ともみ合う。そして合口を取り上げる。

お　道　いい、こんなことはもう二度としないで。あんたがいなくなったあたしにはもうなにもないのよっ。

貞四郎　返せー！

貞四郎、お道に駆け寄りもみ合い、お道がもつ合口に刺される。

貞四郎　あーっ。

お　道　　あ、あんた、あんた、（合口を投げ捨て）おかーちゃーん。

お道、奥花道へ走り去る。貞四郎、腹を押さえもがき苦しむ。

音楽。

貞四郎　　ざまみろ大石、ざまみろ八つぁん、

俺が一番、阿呆だー！

貞四郎、舞台中央、大の字に絶命。暗転。

幕